高遠町天王久保工業団地造成事業
高遠町天王久保地区農林漁業連絡道路整備事業

金井原遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1993. 3

高遠町教育委員会

高遠町天王久保工業団地造成事業
高遠町天王久保地区農林漁業連絡道路整備事業

金井原遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1993. 3

高遠町教育委員会

中央の段丘が金井原遺跡

発刊にあたって

このたび高遠町大字上山田の天王久保地籍に，総面積36,800㎡３区画の工業団地を造成するにあたり，この場所が縄文から奈良・平安時代にかけての長大な歴史を持ち，高遠町では第一に重要な遺跡と言われる金井原遺跡の範囲にあたるため，事前に緊急発掘調査を実施しました。

この事業は，平成３・４年の２年度にかけておこなわれ，前年度については県道沢渡高遠線より分岐し，天王久保に通じる町道の拡幅整備であり，今年度においては工業団地の造成でありました。

河南西部地区は，昭和32年に多くの目的をもって建設された美和ダムの完成により，農地への用水の供給が容易になったため，土地改良事業が早くからおこなわれた地域であり，平成３年度に調査をおこなった下の原地区は，昭和39年に河南土地改良区により開田事業がおこなわれ，平成４年度調査の天王久保地区も同様に昭和42年に開田され，その事業以前に白土（Pm－Ⅰ）を採取したという歴史をもった場所であります。

発掘調査はグリッドによりおこない，結果としてどちらの地区も，前述の開田事業により土層はかく乱されており，特に天王久保地区は土中深くかく乱されていて，遺構等は発見できず遺物についても極めて少数の出土にとどまりました。しかし，調査団長の友野良一先生をはじめ，調査員の松島，寺平両先生のご努力によりまして，二か所の柱状断面を調査することにより，上山田ローム層と言われる上山田地区周辺の地形の成り立ちや地質を細かく解析でき，また，上山田地区内の広い範囲の分布調査をしたことにより，開発は進んではいるものの多くの貴重な資料が採取でき，重要な遺跡として今後も調査を続けていかなければならないと，あらためて考える次第であります。

先生方をはじめ，積極的に調査に参加していただいた作業員の皆さん，また，ご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げるとともに，この報告書が今後の教育文化の向上に活用されることを願い，発刊にあたってのことばといたします。

平成５年３月

高遠町教育委員会

教育長　山川　廣

例　　言

1. 本報告書は，金井原遺跡内において平成３年度におこなわれた，下の原地区から天王久保地区にかけての農林漁業連絡道路整備，並びに平成４年度に実施された，天王久保工業団地造成の２件の事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2. これらの緊急発掘調査は，高遠町役場の委託により高遠町教育委員会が実施した。

3. 本報告書は，平成４年度中にまとめることが要求されているため，調査によって検出された遺物，実測資料などを，より多く図示・図版化することに重点をおき，資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。

4. 本報告書の執筆者及び図版作成者は次のとおりである。

○本文執筆者　　友野良一・松島信幸・寺平　宏・小松博康

○図版作成者　　友野良一・松島信幸・寺平　宏・小松博康・保科まゆみ

○写真撮影　　友野良一・松島信幸・寺平　宏・小松博康

○遺物整理　　友野良一・小松博康・保科まゆみ

5. 本報告書の編集は，主として高遠町教育委員会がおこなった。

6. 遺物・土質標本及び実測図類は，高遠町教育委員会が保管している。

目　　次

口　　絵
発刊にあたって
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査会の組織 …… 1
　第3節　発掘調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　　遺跡の環境 …… 4
　第1節　遺跡の位置 …… 4
　第2節　地形及び周辺の遺跡分布 …… 5
　第3節　地形・地質と三峰川扇状地の発達史 …… 10
　第4節　歴史的環境 …… 21

第Ⅲ章　　遺構と遺物 …… 22
　第1節　調査の概要 …… 22
　第2節　遺構と遺物 …… 28

まとめ …… 33

あとがき …… 34

参考文献 …… 34

写真図版 …… 35

挿　図　目　次

第１図　金井原遺跡調査か所位置図 …… 4
第２図　金井原遺跡周辺の地形及び遺跡分布図 …… 5
第３図　三峰川扇状地の区分図 …… 6
第４図　高遠町河南西部地域の地形面と地質 …… 8
第５図　金井原遺跡柱状断面Ｂ地区実測図・地質柱状図 …… 12
第６図　金井原遺跡柱状断面Ａ地区実測図・地質柱状図 …… 13
第７図　金井原遺跡周辺の地字図・平成４年度分布調査位置図 …… 19
第８図　金井原遺跡平成３年度発掘調査地区平面並びにグリッド調査実測図… 23
第９図　金井原遺跡平成４年度発掘調査地区平面実測図 …… 25
第10図　金井原遺跡平成４年度発掘調査グリッド調査実測図 …… 27
第11図　金井原遺跡調査か所並びに隣接地採取遺物拓影 …… 30
第12図　金井原遺跡周辺分布調査採取遺物拓影（１） …… 31
第13図　〃　（２） …… 32

図　版　目　次

図版Ⅰ　地質柱状図Ａ地区のテフラ …… 15
図版Ⅱ　テフラ中の鉱物の接写写真 …… 16
図版１　金井原遺跡平成３年度調査か所遠景 …… 36
図版２　金井原遺跡平成３・４年度調査か所遠景 …… 37
図版３　金井原遺跡平成３年度発掘調査中の状況 …… 38
図版４　金井原遺跡平成３年度グリッド調査状況（１） …… 39
図版５　〃　（２） …… 40
図版６　金井原遺跡平成４年度発掘調査中の状況 …… 41
図版７　金井原遺跡平成４年度グリッド調査状況（１） …… 42
図版８　〃　（２） …… 43
図版９　〃　（３） …… 44
図版10　〃　（４） …… 45
図版11　〃　（５） …… 46
図版12　〃　（６） …… 47
図版13　〃　（７） …… 48
図版14　〃　（８） …… 49
図版15　金井原遺跡平成４年度柱状断面調査状況並びに発掘調査出土遺物 … 50
図版16　金井原遺跡調査か所隣接地分布調査採取遺物（Ｅ・Ｆ地区） …… 51
図版17　金井原遺跡周辺分布調査採取遺物（Ａ地区・Ｂ地区－１） …… 52
図版18　〃　（Ｂ地区－２・Ｃ地区） …… 53
図版19　〃　（Ｄ地区－１） …… 54
図版20　〃　（Ｄ地区－２） …… 55
図版21　金井原遺跡周辺分布調査採取遺物（Ｄ地区－３・引持北垣外） …… 56

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至るまでの経過

○平成3年度調査

平成3年9月　金井原遺跡発掘調査に係わる届出等を提出。

9月11日　天王久保工業団地造成事業に係わる平成3年度分の事業として，金井原遺跡内における農林漁業連絡道路整備の為の埋蔵文化財保護協議を，長野県教育委員会，高遠町役場，高遠町教育委員会の三者でおこなう。

9月19日　長野県教育委員会より工事に先立って発掘調査を実施すること，また，調査にあたっては高遠町教育委員会がおこなう。などの指示を受ける。

9月26日　調査団長友野良一氏と調査概要の事前打ち合わせをおこなう。

○平成4年度調査

平成4年6月26日　平成4年度天王久保工業団地造成事業に伴なう，埋蔵文化財保護協議をおこなう。

9月　天王久保工業団地造成事業に係わる金井原遺跡発掘調査の届出書などを提出。

12月　長野県教育委員会より，発掘調査を事前に高遠町教育委員会において実施し，調査の結果重要な遺構が発見された場合には，その時点で別途に協議する等の指示を受ける。

第2節　調査会の組織

○高遠町教育委員会

教育委員長	北原　作英
委員長代理	横田　　稚
委　　員	中畑　節子
〃	阪下　哲彦
教　育　長	山川　　廣
教育次長	伊藤　敏明
社会教育係長	伊藤　　清
係	小松　博康
〃	保科まゆみ

○金井原遺跡発掘調査団

団　　長	友野　良一（日本考古学協会会員）
調　査　員	松島　信幸（第四紀学会会員）
〃	寺平　　宏（第四紀学会会員）

第３節　発掘調査の経過

○平成３年度調査分

〔月・日〕

11・７　現場へ資材搬入，テント張り。

11・８　午前９時30分より現地テント内にて調査方法の打ち合わせをおこなう。曇り空。

今回は，現存する町道の拡幅改良に伴なう発掘調査であり，東西に走る道路の北側は切り取った畦畔となっているため，町道南側に現道に沿って10ｍ毎にポイントを落とし，２ｍ×2mのグリッドを設定し，調査作業を進めることとした。

表土剥ぎは重機でおこない一番東側のグリッドをNo.１グリッドとし，作業員は分散しながら掘り下げ作業を進めるが，耕作地への進入路や作物が残っている場所は除けることとした。

午後より降り始めた雨がだんだん強くなる。No.26グリッドまでの19か所を掘り下げ，作業を終了したが，遺物としてNo.26グリッドより石器ハク片３点，No.10グリッドよりスクレーパー１点が出土，遺構は発見できなかった。　（作業員11名）

11・９　グリッド南側断面と底面を整え，写真撮影をおこなう。　（作業員２名）

11・10　グリッド断面調査のための水糸張り，グリッドのレベル測量を午前中かけておこない，午後より各グリッド南側断面及び平面の実測をし，合わせて遺物の取り上げをおこなう。（作業員６名）

11・12　午前中グリッド位置を平板にて測量し，現場の調査をほぼ終了する。（作業員３名）

11・13～14　金井原遺跡全景写真撮影，現場機材などの片付け作業。

11・18　グリッド埋め戻し作業。

11～12月　発掘調査終了届提出，遺物・写真などの整理作業。

○平成４年度調査分

11・21　発掘調査資材を現場へ搬入する。

12・２　本日より発掘調査を開始する。挨拶の後調査団長友野良一氏が調査方法の説明をおこなう。今回対象となる天王久保工業団地造成地区は36,000㎡におよぶ広範囲な場所であり，昭和42年当時天王久保地区開田事業に合わせて，地層中の白土（Pm－Ⅰ）を採取しており，地層がかく乱されている可能性があることから，西から東へ５列に分け，約30ｍ間隔に１か所ずつ幅1.7ｍ，長さ7.0ｍ，深さ約2.0ｍ程度のグリッドを設定し，調査を進めることとした。グリッドは西側から掘り進んだが，地層は下部までかく乱された状態であった。重機にて午前中４か所を掘り下げた。

午後は，調査地西側の墓の手前付近に，表土を取り除いたと思われる地層露出か所があるため，これを重機にて掘り下げて見ることとした。地表部から5.5ｍ掘り下げ礫層が表出した。幸いにもこの場所は，表土が採取されてはいるものの地層はか

く乱されておらず，以降柱状断面として調査をすることとした。また，隣接する天王久保調査地南側畑部分の表面採取も半日２名でおこなう。遺物16点を採取する。午後５時には19か所のグリッドを掘り下げ終了とする。　（作業員10名）

12・３　午前９時より昨日の続きであるグリッドの掘り下げと，グリッド北側断面の仕上げ，柱状断面の整面をおこなう。天気は良好だが，風は寒い。午後よりグリッド断面の写真撮影を始める。グリッドは33か所掘り下げ，柱状断面にシートをかけ午後４時30分解散とする。　（作業員８名）

12・４　午前中グリッド断面調査のための水糸張り，柱状断面のレベル測量をおこなう。H=747.27m（地盤高）

午後友野団長，寺平調査員とともに柱状断面を調査，寺平調査員が土質標本を採取する。　（作業員３名）

12・７　午前10時より友野団長，松島調査員と柱状断面と周辺の地形，地質の調査をおこなう。

午後グリッド断面写真撮影。　（作業員２名）

12・８　早朝より雨と雷に加えて強風が交じり，悪天候であったが，午後２時頃にはあがり，晴れ間が出て来る。柱状断面坑とグリッドは浸水しており，ポンプにて汲み出し作業をおこなう。　（作業員２名）

12・９　終日グリッド位置測図とグリッドのレベル測量をおこない，同時にグリッド北側断面の実測図を作成する。No.３－Aグリッド断面より土器片１個が出土する。（作業員３名）

12・10　午前中グリッド調査地の片付けとグリッド最終調査，柱状断面の最終写真撮影をおこなう。午後小原地区から上山田地区までの集落や，地形の状況を調査した後，柱状断面の表土より20cm毎に標本用の土を28サンプル採取する。同時に柱状断面の南側凹地を調査し，平安内黒他４点を採取。また雨が降り始め，午後４時終了とする。（作業員３名）

12・15　調査地区西北の段丘際に，表土を切り取ってないと思われる部分があるので，この部分の断面を露出させ，地層の実測図，並びに土質標本の採取をおこない，９サンプルを持ち帰る。本日調査した断面を柱状断面Ｂ地区とし，前回の柱状断面をＡ地区とする。午前中で終了。　（作業員２名）

12・16　午後より金井原遺跡の範囲を含めて，上山田地区内の表面採取による分布調査をおこない，遺跡内の金井地区の４か所で204点，引持地区の北垣外で54点，高尾で３点もの遺物を採取した。　（作業員３名）

本日をもって現場の調査を終了する。

２～３月　出土品の整理並びに報告書の執筆，編集作業。

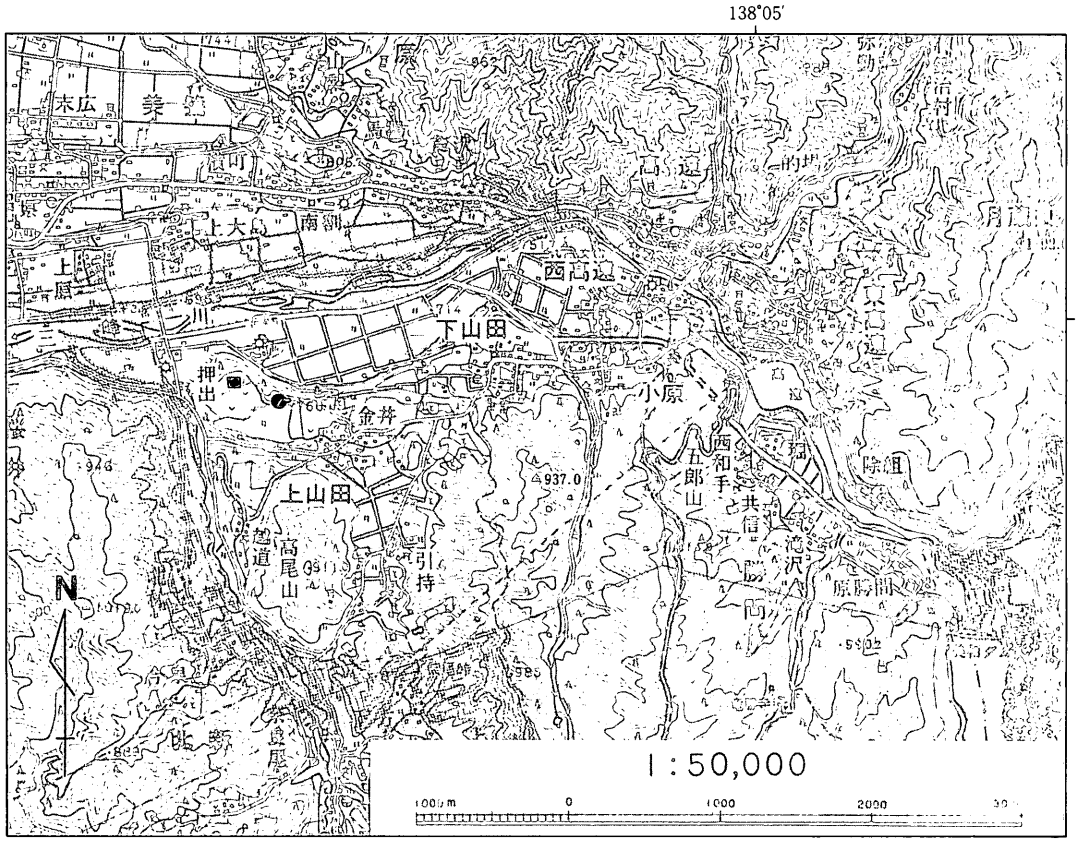
第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置

遺跡の調査地は高遠町河南地区の上山田天王久保周辺である。この場所は高遠町役場より北西へ３㎞，町の最南端にあたる上山田区にあって，天王久保はさらにその西端に位置する。上山田区は三峰川左岸の高位の段丘上に開けた集落で，三峰川の現河床より60～80ｍも高い平坦な台地上にある。天王久保は上山田段丘の北西に突き出した突端部で，新山川が三峰川に合流する地点に半島状に突出している。北側は三峰川の氾濫面に面し，西側は新山川の谷に面しており，天王久保を取り巻く段丘崖は河床から約50mの標高差を持っている。

天王久保の周辺では段丘面が３段に分かれている。高い方から上山田面・金井Ⅰ面・金井Ⅱ面と呼ぶ（第４図）。最上位の上山田面は760m以上の標高を示す。上山田面を侵食して金井Ⅰ面と金井Ⅱ面がある。金井Ⅰ面は標高750mを示し，上山田面を約10m掘り下げている。金井Ⅱ面は標高747mを示し，上山田面を約13m掘り下げている。これらの侵食面が三峰川に向かってだんだん低くなるように配列するのでなく，上山田面に接して金井Ⅱ面がくっつき，金井Ⅱ面の先端が再び高くなって金井Ⅰ面がくっついている。

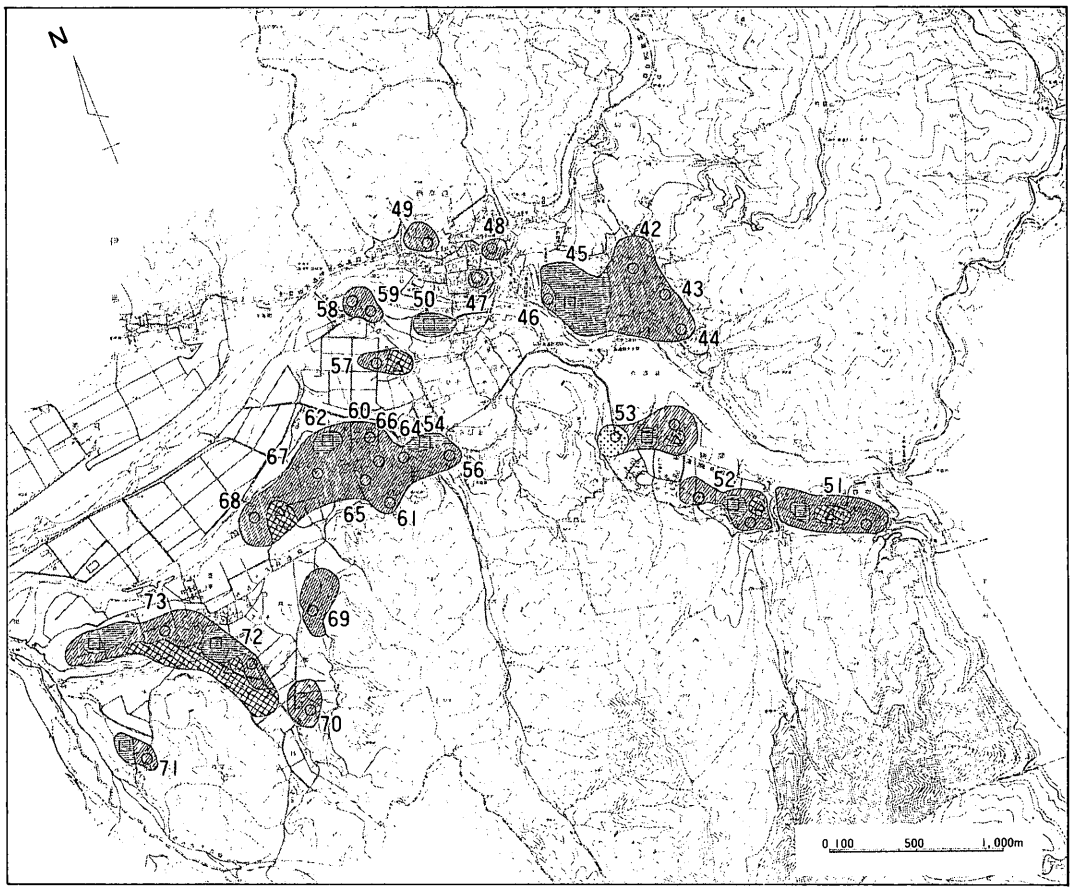
金井原遺跡の調査は金井Ⅰ面並びに上山田面で行われた。



第１図　金井原遺跡調査か所位置図　　●平成３年度調査か所　■平成４年度調査か所

第２節　地形及び周辺の遺跡分布

１）地形及び周辺の遺跡分布



【遺跡名】

42　久保川	43　桂泉畑	44　花　畑
45　高遠城跡	46　殿　坂	47　仲　町
48　旭　町	49　宮　本	50　多　町
51　原勝間	52　滝　沢	53　堀
54　後　沢	56　河南小学校	57　小原城
58　神明原	59　馬　場	60　五輪塚
61　峰の尻	62　古　城	63　原
64　上垣外	65　北垣外	66　竹垣外
67　上条畑	68　八幡原	69　若　宮
70　引　持	71　越　道	72　下の原
73　金井原		

【高遠町遺跡分布図　凡例】

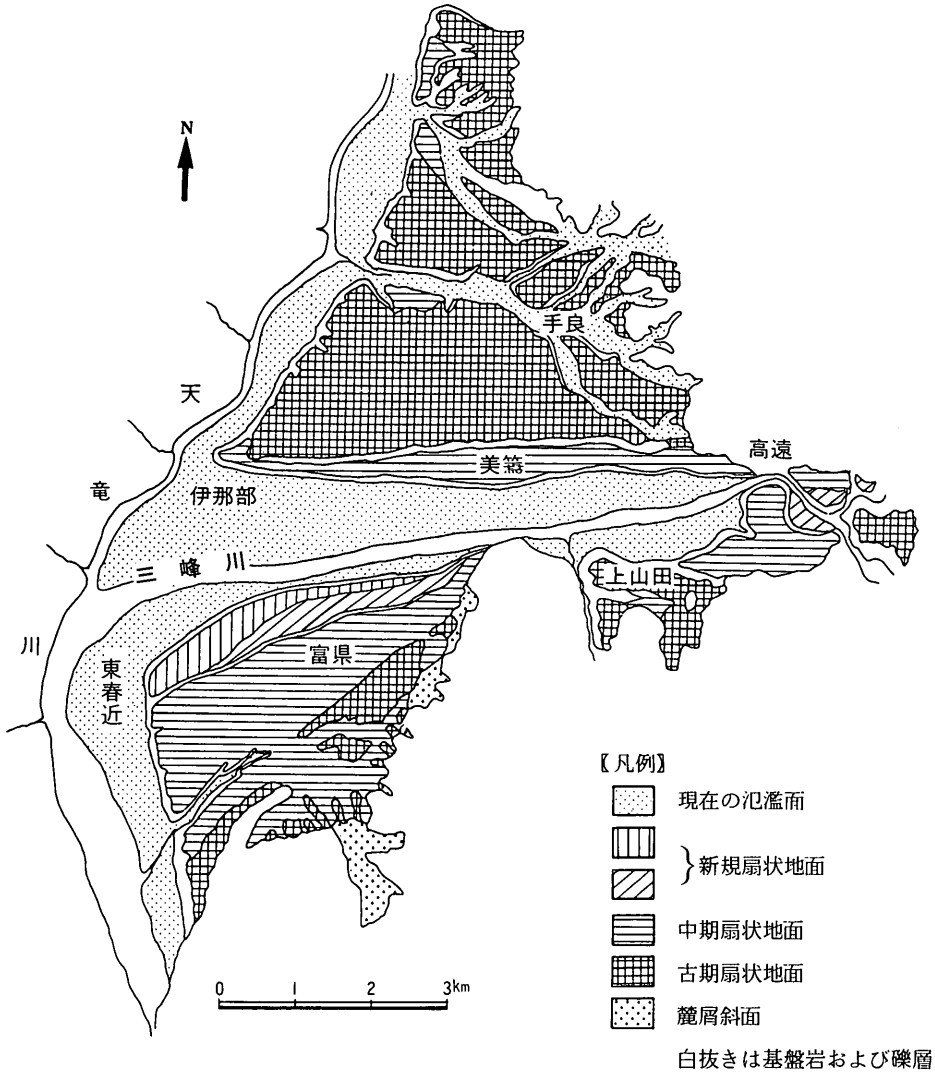
- ○　先土器時代遺物包蔵地
- 先土器時代の生活圏
- ○　縄文時代遺物包蔵地
- 縄文時代の生活圏
- △　弥生時代遺物包蔵地
- 弥生時代の生活圏
- □　奈良・平安時代遺物包蔵地
- 奈良・平安時代の生活圏

第２図　金井原遺跡　周辺の地形及び遺跡分布図（高遠町誌上巻歴史編より）

2）三峰川扇状地について

三峰川は高遠町から伊那市にかけて伊那谷で最大規模の扇状地を形成している。三峰川は南アルプス北部一帯を流域とし，中央構造線の谷に位置する長谷村から伊那山脈を横切って東高遠に出る。東高遠を扇頂とし，縦長10km，扇端部の最大幅11km，新旧の扇面総面積は46.75 ㎢である。

三峰川扇状地は現三峰川の氾濫面を中心にして左岸側と右岸側とに分かれている。調査地を含む上山田・下山田地区は左岸側に位置する。左岸は本地区に加えて伊那市の富県・東春近地区が含まれ，面積19.25㎢である。右岸の扇状地は西高遠と伊那市の美篶・手良・伊那地区が含まれ，面積27.5㎢である。こうした広大な三峰川扇状地は新旧４つの扇状地が合わさっている。古い方から古期扇状地・中期扇状地・新期扇状地・現氾濫面である。（第３図）



第３図　三峰川扇状地の区分図

古期扇状地は左岸側が上山田と福地，右岸側が東高遠と六道原一帯である。これらの扇状地の上には10m弱の厚いテフラ層がおおっている。そして，まわりは新しい扇状地や三峰川によって侵食され，最高位の段丘面として残っている。左岸側の上山田や福地では山麓部に沿って小面積を残すだけとなっている。これに対し，右岸側では美篶・手良・伊那地区の一帯にまたがる六道原として広大な分布を見せている。調査地域の天王久保はこの古期扇状地の一画である。

中期扇状地は左岸側が高遠町の小原・下山田と伊那市の富県地区で，右岸側は西高遠から伊那市美篶地区の中段である。この面上には厚さ1.5～2mのテフラ層がおおっている。新期扇状地や三峰川によって侵食され，段丘地形となって残っている。

新期扇状地は左岸側富県地区の東原・榛原に分布する。他の地区では中期～古期扇状地の縁に小規模なものが断続的にくっついている。東原・榛原の面上では黒土のみがおおっており，黒土中に姶良Tnテフラ:AT（南九州姶良カルデラの噴出物）の火山ガラスが含まれている。

もっとも新しい現在の扇状地が今の三峰川氾濫面である。

3）上山田地域の地形について

上山田地域は標高750～780mの比較的平坦な台地をなしている。当地域は金井地区と引持地区とに大別される。北に位置する金井地区は三峰川の氾濫面および下山田地区に面しており，それらより一段と高い三峰川古期扇状地面である。この面は三峰川によって形成された最初の扇状地であったが，その後，三峰川によって侵食され，左岸側の山麓部に沿うように細長い段丘として取り残された地形である。

上山田地域の南側，伊那市新山地区との境界部に位置する引持地区は，三峰川古期扇状地の形成にともなって生じたゆるい麓屑斜面である。つまり，引持地区の三方は山田城跡・柴尾峠・高尾山にかこまれた湾入部にあたる。湾入している出口の部分が三峰川の古期扇状地によってふさがれ，湾内部が周辺の山麓からの崩積作用で埋積されてできた平坦な地形である。

新山川に沿って越道地区がある。この部分も三峰川の古期扇状地の形成期に，新山川によって運び出された砂礫が埋積してできた平坦な地形である。本流の三峰川が侵食期に入り，古期扇状地の掘下げにともなって，新山川も同じように古い埋積物を掘り下げた。こうして，高尾山の山腹に段丘地形として取り残された部分が越道地区である。

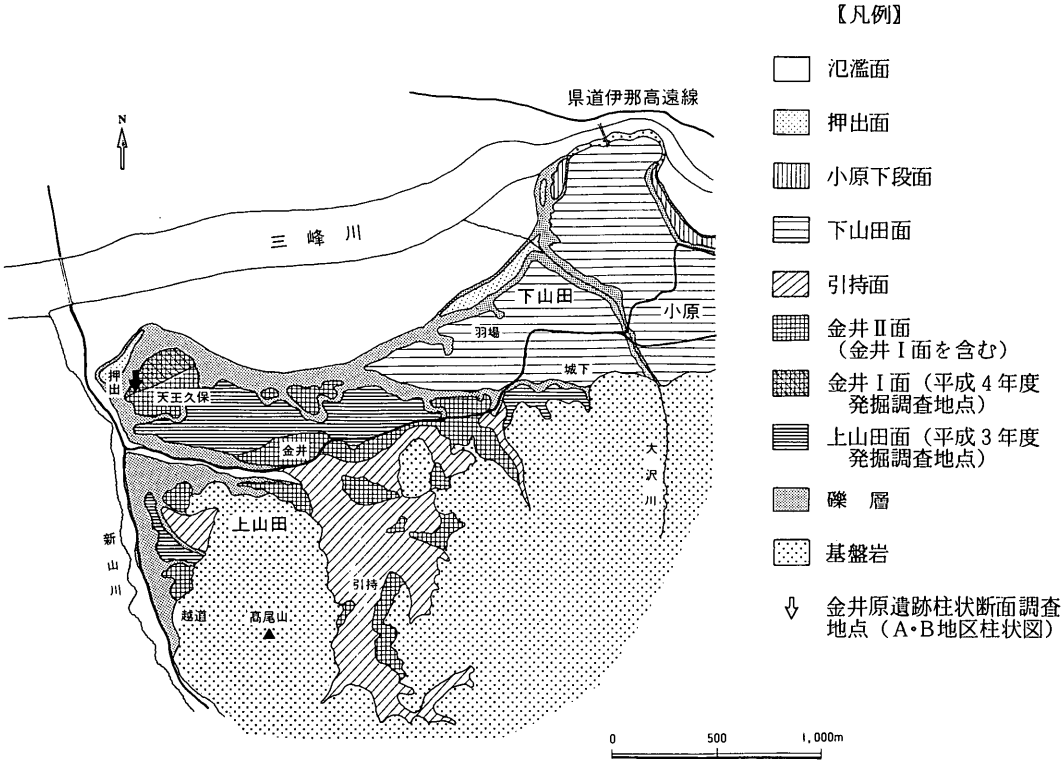
4）河南西部地域の地形面区分（第4図）

① 上山田面

県道沢渡高遠線の北側に当地域では一番高い地形面として上山田面がある。面上には厚いテフラ層が堆積しており，乾燥した台地となっていて，かつては畑作地として利用されていた。東西にのびた馬の背のような台地で水利に恵まれず，台上には集落の発達がない。近年美和ダムが建設され，美和ダムより取水した一貫水路が上山田面まで延長しており，農地改良によって水田化されている。調査地の天王久保周辺も同様である。平成3年度調査はこの面でおこな

われた。

上山田面は平坦ではあるがゆるやかなうねりを見せている。最古期の三峰川扇状地として形成され，その左岸側の扇側部が侵食を免れて馬の背状の台地として残っているためで，原地形は自然堤防として，ある程度の凹凸があったものと推定される。現在，平坦性の地形面を呈しているのは原地形をおおっているテフラ層のためであろう。上山田面上の風成テフラ層は三峰川古期扇状地の中で注目すべき要素がある。古期扇状地を代表する六道原面においては，御嶽第1テフラから上のテフラ層を厚く堆積させている。これに対し，上山田面では御嶽第1テフラより下位のテフラ層からはじまっている。かつて，長野県地学会報に上山田ローム層として報告したものである。上山田面が三峰川扇状地としては最古期のものにあたるというのは，この上山田面ローム層の存在である。つまり，右岸側に広く分布している六道原面に先んじて形成した扇状地にあたる。



第4図　高遠町河南西部地域の地形面と地質

② 金井Ⅰ面

上山田面の西北部に突出した半島状の台地の先端部が金井Ⅰ面であり，上山田面より10mほど低い。この面は今回の金井原遺跡調査地にあたる。おおくの場所でトレンチを掘り，金井Ⅰ面を被覆するテフラ層を観察してみた。表土から6.5mまでテフラ層があり，その最下位に御岳第1テフラが見られる。この様子は六道原面と同様である。上山田面を侵食した扇状地の一部にあたるものである。

③ 金井II面

金井Ⅰ面よりさらに低い段丘面と，山麓部に点在する古い緩斜面とを一括して金井Ⅱ面とした。上山田面の北側，三峰川に面した側で，上山田面を金井Ⅰ面よりさらに掘り込んだ段丘面として金井Ⅱ面ができている。一つは調査地の天王久保であり，もう一つは芝平である。これに対し，上山田面の南側から引持地区では明瞭な侵食面としてではなく，上山田面や山麓部をとりまくように緩傾斜面が分布する。数か所において御嶽第1テフラが確認できたため，古期扇状地面群に属する一連の地形としてとらえている。

④ 引持面

伊那山脈末端部の山麓小窪地として引持面がある。三峰川古期扇状地の形成によって出口をふさがれたため，周辺の山地から流れ出した砕屑物によって埋積され，低平な窪地となっている。引持面からの排水路は金井沢だけであり，金井沢の谷頭侵食が引持まで達していないため平坦度が維持されている。

⑤ 下山田面

三峰川の中期扇状地にあたり，古期扇状地の上山田面を20mほど掘り下げて発達している。高遠地区では中期扇状地面が左岸側に広く分布しており，下山田・小原・勝間の集落を擁している。地形的には典型的な河成段丘となっている。これは，下山田面をさらに侵食してより新しい新期扇状地ができたことによる。

⑥ 小原下段面

下山田面を侵食してできた段丘面で，高遠小学校のある下山田面の縁にくっついている。

⑦ 押出面

調査地天王久保の段丘崖下に現在の三峰川氾濫面より数mの高さで，一番新しい段丘面としてくっついている。同様な段丘面は下山田面の下側にもくっついている。三峰川の下流部ではこうした最低位の段丘面が比較的広く発達している。これらは三峰川の新期扇状地にあたる。

第３節　地形・地質と三峰川扇状地の発達史

１）天王久保のテフラ

調査地の天王久保では金井Ⅰ面を被覆するテフラの調査を行った。このため，金井Ⅱ面に面する侵食崖を利用し，金井Ⅱ面に掘り込んだＡ地区トレンチと合わせて深さ5.5ｍの柱状断面を観察した。（第６図・図版Ⅰ，Ⅱ・図版15）

トレンチの上部は表土を欠いているが，これは開田化による農地改良によるもので，近くに掘った別のＢ地区トレンチ（第５図・図版15）から表土までの欠損部はおよそ１ｍである。

(1)　柱状断面Ａ地区のテフラ

以下に柱状断面Ａ地区の観察記録を示す。柱状図（第６図右）に示したように①から⑩に地層を細分し，それぞれについて説明する。テフラ名や年代は竹本ほか（1987）・町田ほか（1992）による。

①　褐色の硬質火山灰で，有色鉱物はしそ輝石の大きな結晶が目立つ。磁鉄鉱や普通輝石の他に角閃石をわずかに含むが，角閃石は下部では見られなくなる。無色鉱物のほとんどは長石であり，石英は少ない。この層は鉱物組成からみて，大部分は御嶽火山の新期火山灰であり，その中へ風によって２次的に運ばれてきた岩石の風化物などの岩片が混じったものであろう。

最上部の火山灰層にはバブル型の火山ガラスが混入するものの，その量は極めて少ない。このガラスは形態から姶良Tnテフラ（ＡＴ）と思われる。通常このガラスの含まれる層準は地表から0.5ｍ～0.7ｍの深さが一般的である。しかし，ここでは黒土やＡＴの多く含まれる層がみられないのは，新期火山灰層上部の0.5ｍ～0.7ｍが削り取られているためである。

②　長径５～10㎜の赤褐色スコリアが30～40㎝の厚さで堆積している。有色鉱物は磁鉄鉱としそ輝石，無色鉱物は長石が目立つ。美しい結晶面を持った0.5㎜大の磁鉄鉱が光を反射して輝いている。この層は鉱物組成や層準から，御岳三岳テフラ：On−Mt,（小林1962の御岳第Ⅵ軽石，Pm−Ⅳ）である。

③　非常に硬質で濃褐色の火山灰で，火山起源と思われる岩片を含むとともにコークス状のスコリア層がはさまれる。これは千本松スコリアに相当するものと思われる。なおスコリアの上部には２～３㎜の黄色軽石が混入している。

③と④との境界が新期御嶽上部テフラ層と下部テフラ層との境界である。その面は凹凸に富み，下部層の色あいがうすく，上部層の色あいが濃いためはっきりと確認できる。上部層の最下部に千本松スコリアが混入するため全体に硬化していて識別しやすい。

④　淡い褐色の軟質火山灰層で，主な鉱物は長石・しそ輝石・磁鉄鉱などである。

⑤　ベージュ色の部分とカーキ色の部分が混じった軟質の火山灰層で，鉱物は長石が非常に多く，その他にはしそ輝石・磁鉄鉱・角閃石などを含み，岩片もかなり目立つ。この層にはバブル型の火山ガラスが僅かに含まれている。このガラスは層位的には阿蘇４テフラ（Aso−4）の可能性はあるものの断定はできない。

⑥　長径２～３㎜の橙色軽石層で，下底面はほぼ水平であるが，上面は凹凸が激しい。したがって層厚は一定しないが，平均50～60㎝である。含まれる有色鉱物は1.5㎜にも達する大きなしそ輝石の結晶と磁鉄鉱で，無色鉱物は長石である。しそ輝石には磁鉄鉱の結晶が食い込んで付着しており，これらの特徴から，この軽石は御岳伊那テフラ:On-In（御岳第Ⅱ'軽石，Pm-Ⅱ'）である。

⑦　灰白色の火山灰層で白色の岩片を多量に含み，有色鉱物は少ない。この層の中には黄色軽石の層がレンズ状に挟まれており，この軽石に含まれる鉱物は長石・磁鉄鉱・黒雲母・バーミキュライト・角閃石・しそ輝石などで，中でも長く伸びてＳ字状になったバーミキュライトが特徴的である。鉱物組成からみると塩尻軽石層:On-So（Pm-IB）と類似する。

⑧　軽石が白く粘土化してべとべとになっている。含まれる鉱物は長石の他に磁鉄鉱・黒雲母・角閃石・軽石型の火山ガラスなどで，このような鉱物組成から，この軽石は御嶽第１テフラ（Pm-I）である。

トレンチの反対の面では御嶽第１テフラが粘土化せず，長径１～２㎝大の淡黄色軽石粒として見られる。

⑨　暗褐色によく風化した砂まじりの粘土層である。鏡下では長石・石英・磁鉄鉱などの破片も見られるが，火山起源の鉱物の結晶はない。岩石の風化物などが風によって運ばれ，堆積したものと考える。

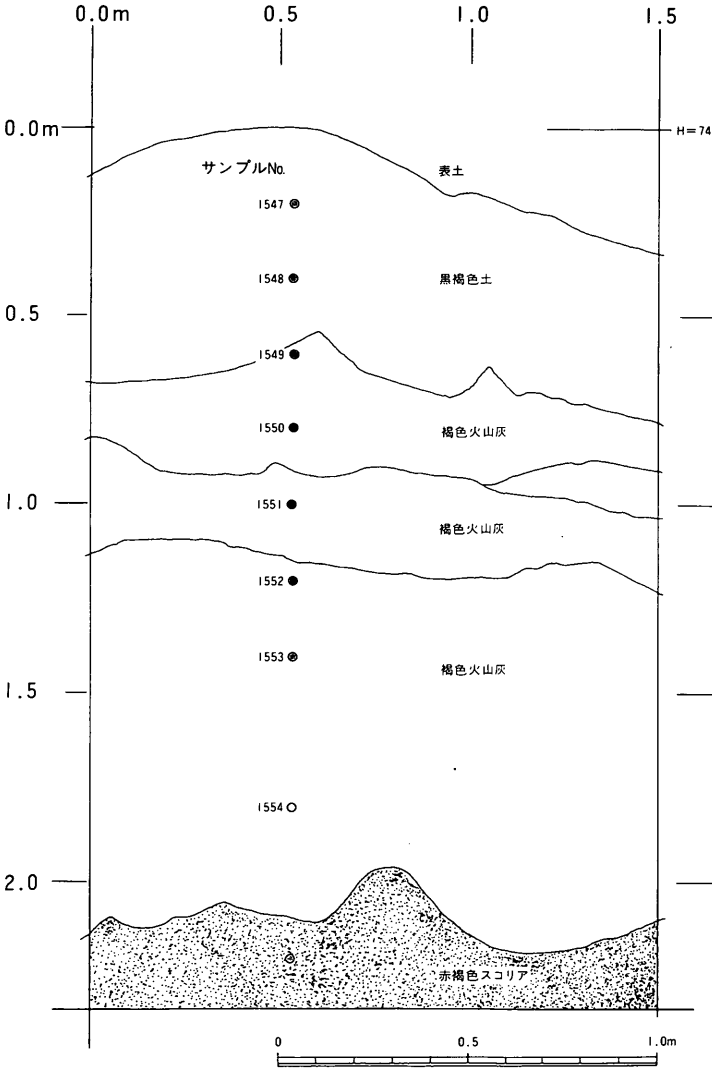
⑩　トレンチの場所では詳しい観察ができなかったが，付近の露頭の礫層から判断すれば，礫は砂岩・粘板岩・緑色岩・チャート・石灰岩などで，三峰川によって運ばれてきた古期扇状地礫層である。

(2)　柱状断面Ｂ地区のテフラ

柱状断面Ａ地区付近の表土の残されている場所から，深さ1.8ｍまでの柱状資料を得ることができた(第５図)。　ここでは上部の約40㎝が黒褐色を帯び，褐色の下部層に漸移している。鉱物はしそ輝石・磁鉄鉱・普通輝石・長石を主とし，岩片・石英・角閃石などを含む。

地表から0.6ｍまでの間には，姶良Tnテフラと思われるバブル型の火山ガラスが含まれ，その含有量は，深さ約50㎝の層準に最も多い。また，深さ１ｍから1.8ｍの間の火山灰層の中にはコークス状の岩片が多く含まれている。

この断面の堆積物は鉱物組成から，御嶽火山の新期火山灰を主とし，その上部に姶良Tnテフラが混入したものである。



柱状図	特徴	サンプルNo.	主な鉱物	火山ガラス bw	火山ガラス pm	その他
0.0m	H＝748.02					
	黒褐色	1547	hy＞mg＞au＞fl＞岩片＞qz＞ho	・		
		1548	hy＞mg＞au＞fl＞岩片＞qz＞ho	・		
0.5	姶良Tnテフラ(AT)	1549	hy＞mg＞au＞岩片＞fl＞qz＞ho	●		
		1550	hy＞mg＞au＞fl＞岩片＞qz＞ho	・		
		1551	hy＞mg＞au＞fl＞qz＞岩片＞ho			
1.0	褐色火山灰	1552	hy＞au＞mg＞fl＞岩片＞qz＞ho			コークス状岩片を含む
		1553	hy＞au＞mg＞岩片＞fl＞qz＞ho			コークス状岩片を多く含む
1.5						
		1554	hy＞au＞mg＞岩片＞fl＞qz＞ho			コークス状岩片を多く含む
2.0						

凡　例

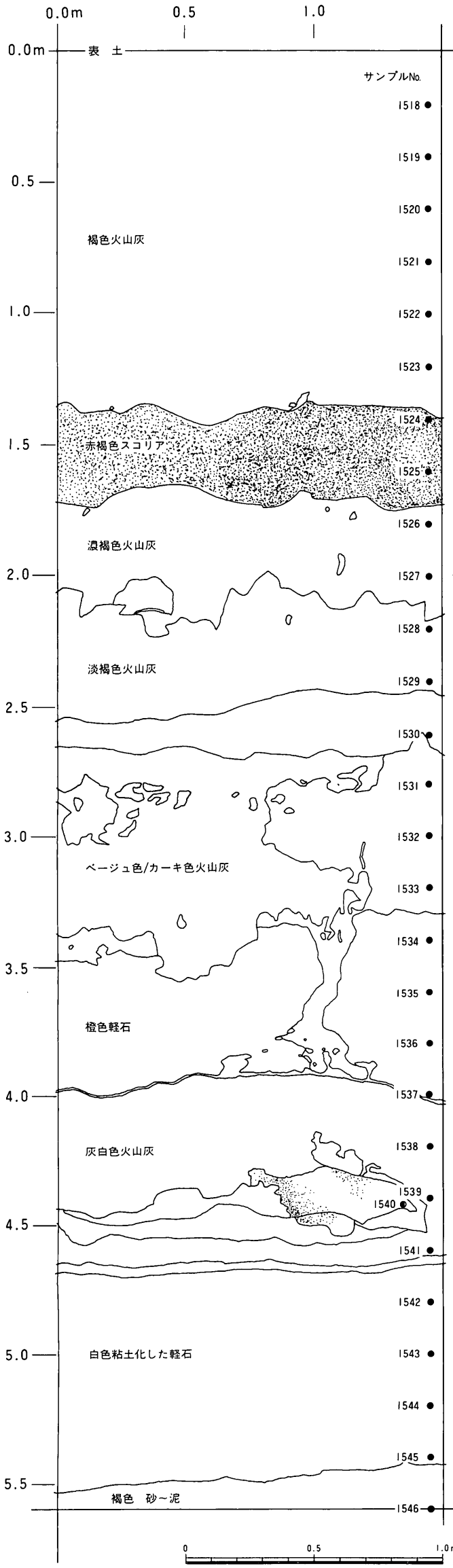
〔鉱物〕au：普通輝石、hy：しそ輝石、ho：角閃石、bi：黒雲母、mg：磁鉄鉱、qz：石英、fl：長石

〔火山ガラス〕bw：バブル型火山ガラス、pm：軽石型火山ガラス、br：褐色ガラス

ガラスの含有量　◉ 10%以上、○ 1～10%、・ 1%以下

〔柱状図〕△軽石、▲スコリア、⁝砂～泥、○礫、□角礫、≡黒土、白抜きは火山灰

第5図　金井原遺跡　柱状断面B地区実測図・地質柱状図



H=747.27

柱状図	区分	特徴	サンプルNo.	主な鉱物	火山ガラス bw	火山ガラス pm	参考年代値(町田ほか1992) ×10⁴y.B.P
		0.0m 747.27m	1518	hy>mg>fl>au>岩片>ho>qz	・		AT:2.1～2.2
			1519	hy≫mg>au>fl>岩片>ho			
			1520	hy≫mg>au>fl>岩片>ho			
	①	褐色火山灰 硬質	1521	hy≫mg>au>fl>岩片>ho			
			1522	hy≫mg>au>fl>岩片>ho			
			1523	hy>fl>岩片>mg>au>qz			
			1524	hy>fl>岩片>mg>au>qz			
▲▲▲	②	赤褐色スコリア 御岳三岳テフラ：On-Mt 径 5～10mm 層厚 30～40cm	1525	fl>hy>mg>au			On-Mt:Ca8
			1526	mg>hy>fl 結晶 大0.5mm			
△△△	③	2～3mmの黄色軽石混入 濃褐色火山灰 非常に硬質	1527	岩片>fl≫hy>mg>ho			
			1528	岩片≫hy>mg>ho コークス状の岩片を含む			
	④	淡褐色火山灰 軟質	1529	fl>mg>hy>岩片>au>ho			
			1530	fl>hy>mg>岩片>ho			
	⑤	ベージュ色/カーキ色火山灰 軟質	1531	fl>岩片>hy>mg>ho	・		
			1532	fl≫hy>岩片>mg>ho>au	・		
			1533	fl≫hy>岩片>mg>ho	・		
			1534	fl≫hy>mg>岩片>ho	・		
△△△	⑥	橙色軽石 御岳伊那テフラ：On-In 層厚 50～60cm 径 2～3mm	1535	fl>hy>mg			
			1536	fl>hy>mg			On-In:Ca9
			1537	fl>hy>mg			
	⑦	灰白色火山灰 レンズ状に挟まれる軽石層	1538	岩片(白)>fl≫mg>hy>ho			
			1539	岩片(白)>fl≫mg>ho>hy			
△△			1540	fl>mg>bi,バーミキュライト>ho>hy			
			1541	岩片(白)>fl≫mg>ho>hy			
△△△	⑧	白色 粘土化した軽石 御岳第Ⅰテフラ：On-Pml トレンチの反対の面では粘土化していない黄白色の軽石粒(径1～2cm)が観察される	1542	fl>mg>bi>ho		・	
			1543	fl>mg>bi>ho		○	On-Pml:Ca10
			1544	fl>mg>ho>bi		・	
			1545	fl>mg>ho>bi			
・・・	⑨	褐色 砂～泥	1546	全て風化岩片(fl,qz,mgなどを含むが、火山起源の鉱物の結晶はない)			
○○○	⑩	礫層 三峰川水系の礫					

凡 例

〔鉱物〕au：普通輝石、hy：しそ輝石、ho：角閃石、bi：黒雲母、mg：磁鉄鉱、qz：石英、fl：長石
〔火山ガラス〕bw：バブル型火山ガラス、pm：軽石型火山ガラス　　ガラスの含有量 ●10%以上、●1～10%、・1%以下
〔柱状図〕△ 軽石、▲ スコリア、⋮⋮ 砂～泥、○ 礫、白抜きは火山灰

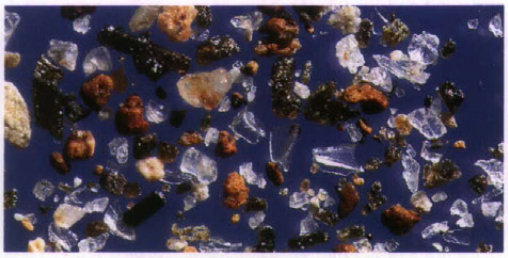
第6図　金井原遺跡　柱状断面A地区実測図・地質柱状図

図版Ⅰ　地質柱状図Ａ地区のテフラ

三峰川水系の礫層の上に、御岳火山の火山灰や軽石が堆積し、約６ｍのテフラ層をつくっている。テフラ層には３枚の軽石層がはさまれ、上部の赤褐色の層は御岳三岳テフラ、中間のオレンジ色の層は御岳伊那テフラ、最下部の白色粘土化した層は御岳第１テフラと呼ばれている。

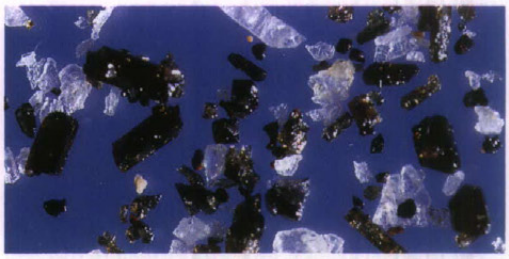
図版II　テフラ中の鉱物の接写写真

（1.は地質柱状図B地区、 2～8.は柱状図A地区、写真の画面の横の長さは約6㎜）



1　深さ40～60cmの鉱物

しそ輝石（柱状）や岩片に、姶良Tnテフラの火山ガラスが混じる。



2　深さ160～180cm、御岳三岳テフラの鉱物

しそ輝石（柱状）、磁鉄鉱（粒状、黒）、長石（白～透明）を主とする。

3　深さ200～220cmの鉱物

しそ輝石や磁鉄鉱・長石に岩片が混じる。岩片にはコークス状のものも見られる。

4　深さ360～380cm、御岳伊那テフラの鉱物

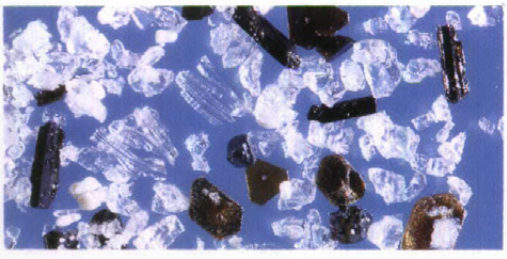
しそ輝石（磁鉄鉱付着）、磁鉄鉱、長石を主とする。

5　深さ420～440cmの鉱物

白色の岩片と透明に近い長石に、磁鉄鉱や角閃石がわずかに混じる。

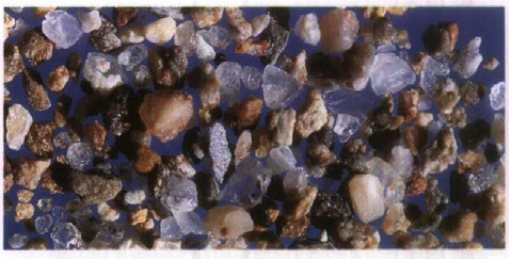
6　深さ430～450cm、レンズ状軽石層の鉱物

長石（白～透明）、磁鉄鉱、黒雲母、の他にバーミキュライト（白・黒、柱状）が目立つ。



7　深さ480～500cm、御岳第1テフラの鉱物

長石（白～無色）、黒雲母（六角形）、角閃石（黒・柱状）、磁鉄鉱（黒・粒状）に繊維状の火山ガラスが混じる。



8　深さ540～560cmの鉱物

風化岩片を主とし、火山起源の鉱物の結晶は見られない。

2）三峰川扇状地の発達史

上山田地域は三峰川扇状地のなかで，三峰川古期扇状地の原形が残っている重要な場所である。今後の調査を期待して，三峰川扇状地の発達史を長年の調査結果の中から概括的に述べる。

(1) 天神山火山泥流の時代

伊那市美篶南割の天神山は火山泥流堆積物で構成され，その残丘地形として孤立丘をつくっている。火山泥流堆積物は安山岩の巨礫を大量に含んだ火山角礫岩類である。同様な安山岩が高遠町藤沢地区の杖突峠一帯に塩嶺累層として広く分布するので，火山泥流は藤沢谷を流下してきたものである。天神山火山泥流の下位には三峰川の河川堆積物が存在する。緑色岩をはじめとする赤石山地の礫種で構成される。藤沢谷を流下した火山泥流が高遠に達し，三峰川と合流したところで速さを減じ，巨火山角礫を中心に残されたものと推定される。

火山泥流の時代は前期更新世の170万年前頃であろう。これと同様な火山泥流が下伊那地区では“みそべた層”と呼ばれ，フィッション・トラック年代から170万年前頃とされている。

(2) 三峰川古期扇状地の時代

広大な古期扇状地は天神山火山泥流に引き続き，60万年前頃までの長期間を要してつくられてきた。この背景をなしたのが南アルプスの上昇である。南アルプスの上昇が活発になり，これに伴った激しい侵食作用により，大量の砂礫が三峰川によって運び出されてきたためである。

古期の扇状地は巨大な扇状地を形成した。最も拡大した時には現在の天竜川の位置から西へはみ出している。南箕輪村の神子柴の丘陵をつくる礫層は，三峰川から運ばれた礫と天竜川上流の諏訪方面から運搬されてきた礫とが混じり合っている。50～60万年前頃である。

(3) 古期扇状地の解体と埋積

60～70万年前頃から30万年前頃の間，巨大扇状地は一時的な侵食・解体期や，一時的な埋積期をくり返していたと推定される。これらの動きは三峰川上流部からの礫供給量の変化，三峰川の流量の変化，さらに，下流部にあたる駒ケ根地区（上伊那南部）の天竜川の河床変化などの影響によっておこっている。

中央アルプスの上昇が60万年前頃から活発になった。その結果，中央アルプス主要部から押し出してきた大量の砂礫層が盆地内部を埋めつくし，この影響で天竜川は東側の伊那山脈へ押しつけられている。これは天竜川の堰き止め作用としてはたらき，すぐ上流側にあたる三峰川扇状地の一部に湖沼性の低湿地が生じ，粘土層・亜炭層などが堆積した。同様なことは竜西側の扇状地末端部にもおこっている。

上山田地区は古期扇状地の中で一番早く離水した部分である。そして，最初につくられた扇状地が侵食を受け，いくつかの段丘状の地形に分化している。これらの地形は高い方から上山田面・金井Ⅰ面・金井Ⅱ面と３段に区別できる。

30万年前以降，古期扇状地は侵食期に向かった。現在の中期扇状地の分布する美篶区中段か

ら富県区の大部分が侵食されていった。

(4) 中期扇状地の時代

15万年前頃の気温低下期（氷河期）を過ぎると，古期扇状地は三峰川に沿ってどんどん掘り下げられていった。とくに，左岸側の富県地区に広大な侵食面が広がった。それが中期扇状地である。中期扇状地は侵食性の薄層扇状地である。侵食が最も活発になったのは13万年前ころの亜間氷期である。これは，降水量の増加による天竜川河床の低下が大きく影響しているものと推定されている。

10万年前ころ，一時的に三峰川および天竜川の河床上昇がおこっている。これは中央アルプス側からの砂礫の押し出しが再び活発になったためである。この時期に古期扇状地面の近くまで埋積が進み，古期扇状地面の地下水位が上昇した。この時期に御嶽火山が大規模に活動し，御嶽第１テフラと呼んでいる大量の降下軽石層が堆積している。

10万年前から６万年前にかけて再々度侵食期となり，４万年前には中期扇状地が離水している。この間，台地と化した古期扇状地の上には御嶽火山の降下テフラが次々と堆積していった。４万年前頃の亜間氷期に四度侵食期を迎え，活発になった三峰川の下刻作用から取り残された部分が中期扇状地である。中期扇状地や，次の新期扇状地は古期扇状地を侵食する過程で生じた段丘地形で，形態的には扇状地の形を呈しており，扇状地段丘といってもよい。

(5) 新期扇状地の時代

新期扇状地は中期扇状地を掘り込んでいく三峰川が，現在の氾濫面をつくりあげる途中におこった一時的な堆積期のなごりである。たまたま，２万数千年前頃，最終氷期中の最寒冷期のころ，一時的に南アルプスからの砂礫の供給が増大し，新期扇状地面を形成した。この年代は新期扇状地が一番広く分布している富県～東春近地区の東原・榛原において，南九州の姶良カルデラから飛来したＡＴ火山ガラスの存在から裏付けられている。

２万年前以降は五度侵食期に入り，今の三峰川氾濫面をつくりあげてきた。この面は三峰川の河道が少しずつ移動しながら側方侵食をして扇形の現氾濫面をつくっている。これが現在の薄層扇状地である。

第７図　金井原遺跡　周辺の地字図・平成４年度分布調査位置図

第4節　歴史的環境

金井原周辺の遺跡について，以前から調査されたまとめの概要は，高遠町誌（上巻歴史編）に記されている。その中から上山田地域についての事例を拾ってみると，『若宮遺跡』は，鏡山の西斜面上から半ノ木地籍あたりまでの範囲に広がっており，そこには湧水が見られた。昭和35年に一貫水路を開設した際，土器などが箱一杯ほど出土したと伝えられているが，これらの土器については，研究がなされないまま行方不明となってしまったと，前田利経さんが語っておられる。『引持遺跡』は，現在山麓付近まで開田されていて，遺物の採集は困難な状態であり，建築などの造成時に調べる以外は手立てが無くなってしまった。南信日々新聞の小松記者が，住宅造成の際に土器数個体分採取したと報告している。まだ考古学に対する住民の関心が薄かった頃の事であり，残念である。

今回は金井原周辺の遺跡の再調査ということで，高遠町教育委員会の牛山博，北村勝彦両社会教育指導員と小松博康主事，調査団長の友野良一の四名で，引持及び金井原一帯の遺物の分布調査を実施した。調査の概要を述べると，引持北垣外地区の字上手，前田付近では，土師器の小破片（奈良・平安時代）と，中世の窖窯期，瀬戸美濃系の天目茶碗が出土した。この事実により，北垣外周辺は古代末から中世にかけて，人びとの住居地であったことを証明することができた。また，北垣外のほか，細廻り，長手下，豊ケ沢五神，高尾などの地域を調査してみたが，今回の結果からは直接住居につながる遺物は発見されなかった。しかし，打製石斧や摩製石斧など古代の人の生活に係わりのある遺物は，数多く検出された。この引持を取りまく自然と開田の状況は，本当に目を見張るものがある。その背景には，この地域に多く存在する小谷や洞などから流出する湧水を利用し，原始・古代からこの盆地に住んだ人びとが，それぞれの時代をたくましく生き抜いてきた結果と言える。現在ではあまりにも立派に開田されて，古代を偲ぶ場所を見付けるのに苦労する程になってしまったが，まだ山に囲まれた狭い谷間には「山の田」が所々に残っているのを見ることができる。こうした「山の田」が連なった引持の村には，古代の政治，経済の仕組みが根付いていたと思う。そして『金井原（金井西）遺跡』の今回の調査から，高尾山・鏡山・三界山の裾野に囲まれた，湿地を利用しての遺跡群からは，縄文時代前期（6000年前），中期（4000年前），後・晩期（3000年前），そして米作文化の弥生時代（2000年前），古墳時代（1700～1300年前），奈良・平安時代（1200～900年前）の各時代の人々が，継続して生活を営んだ足跡を整理することができた。また町誌でも開田前の記録として，前田利経さんの話が伝えられており，小田井付近からは「石がます」という遺構がよく発見され，この「石がます」からは炭化された「米」が出土したようである。その他に，工事中山際から弥生時代の壷が並んで発見されたが，工事中で調査できなかったという記録もある。また，小田井上の公民館隣の上条さん宅でも，柱穴を掘ったら弥生時代と思われる甕が発見されたといっている（教育委員会で保存）。いずれも弥生時代の遺構や遺物に関する話である。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　調査の概要

今回の調査は工業団地の造成と，その工業団地への連絡道路を拡幅整備する2つの事業が，金井原遺跡の範囲内でおこなわれるために，事前に平成3・4年度の二年度にわたっておこなわれた緊急発掘調査である。

平成3年度における発掘調査の概要は（第8図・図版3～5），高遠町大字上山田の字山田原と言われる上山田1870番地から，同じく2132番地の天王久保に至る延長644mの現町道を，農林漁業連絡道路整備事業により3.0～4.0m拡幅し，幅員6.0mとする計画であり，対象面積3,560㎡の内上山田1908番地から1981番地までの，直線部分約240mの区間について，現道路に沿って10m間隔で2m×2mのグリッドを，道路北側は切り取った畦畔となっているため，南側に設定していった。畑にはまだ作物もあり，農地への進入路など，掘ることが困難なか所は位置をずらして，最終的には19グリッドを掘り下げた。グリッドの深さはテフラ層までとし，地表面から下がること40cm～2m20cmの間であった。現況水田の部分は以前開田工事がおこなわれており，地層断面に見られるように，No.9グリッド以降No.26グリッドまでその工事の影響からか，地層のかく乱が著しく，No.1～No.7グリッドまでの地域については，土地改良工事がおこなわれてはいないものの，この付近は畑への根菜類の作付けが多く，収穫の際にトレンチャーを使って，深く耕起されているため，その跡が各所に見受けられ，テフラ層より下の層まで達していた。発掘調査面積は，約110㎡であった。

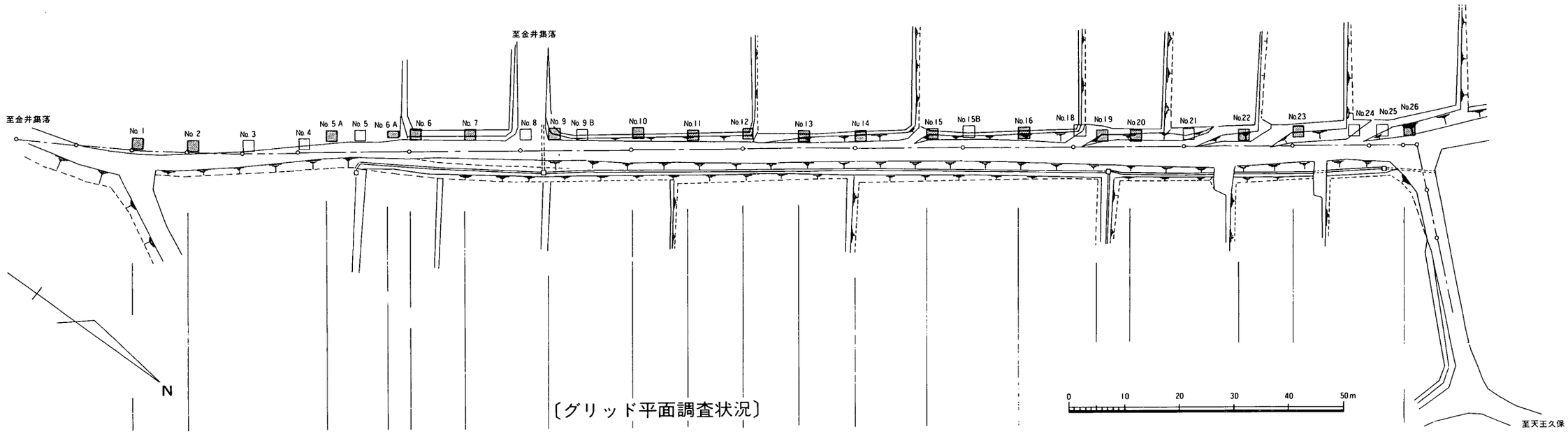
調査の成果として，遺構等は発見できなかった。出土遺物としてNo.26グリッド地層中より，石器のハク片3点とNo.10グリッドよりスクレーパー1点を発見できた。調査期間は平成3年11月8日から，11月14日にかけておこなわれた。

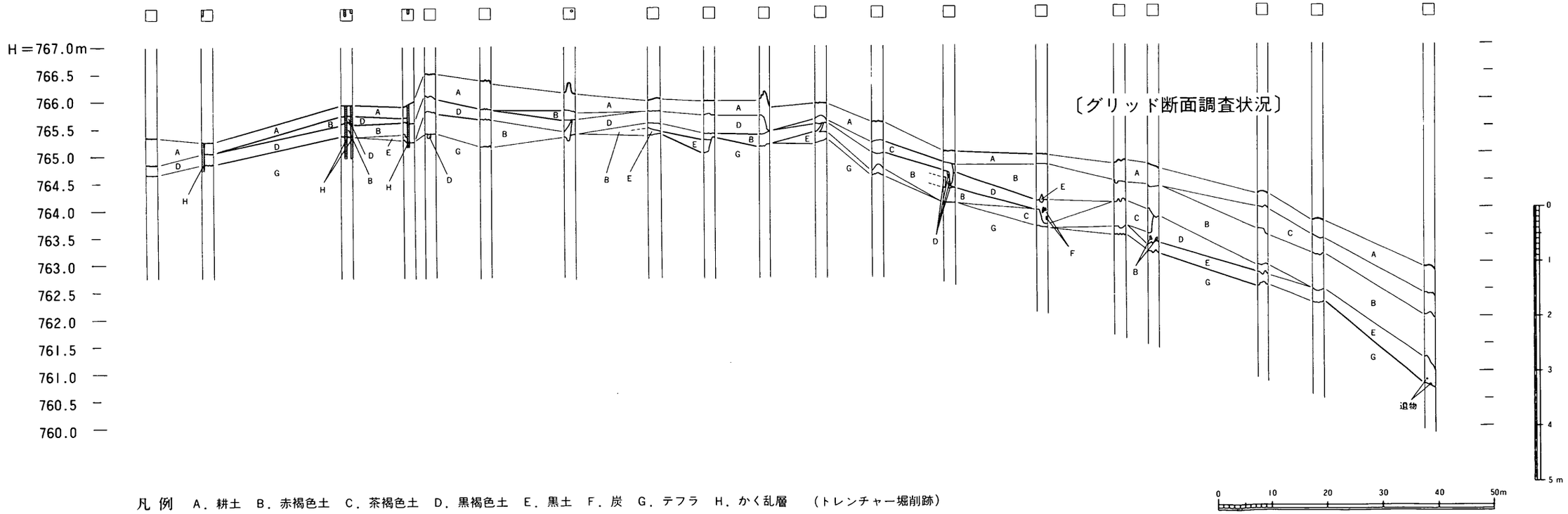
平成4年度調査については（第9，10図・図版6～14），天王久保工業団地造成事業に先立ち，平成4年12月2日より12月16日まで，高遠町大字上山田2069番地他，総面積36,763㎡のうち約600㎡にわたって調査を実施した。

この地区についても昭和42年度に開田事業がおこなわれており，その事業以前に白土(Pm-I）を採取したという事実もある。調査の手順として広大な範囲に及ぶため，南から北に向かってAからEの5列に分け，西から東へNo.1～No.9のグリッドを約30m～40m間隔で配し，No.1－Bグリッドより東に向かって掘り下げることとした。グリッドは幅1.7m，長さ7.0m，深さは平均2.0m程度としたが，(Pm-I)を採取してあるためか，地層深くまでかく乱されており，No.1－AからNo.9－Dまで33か所のグリッドを設定した中で，かく乱されていないと思われる層が発見できたのは9か所のグリッドで，全体の約30%程度であった。しかし，白土の採取されていないグリッドにおいても地層上部は切り取られていたり，かく乱されている状態で遺構等に結び付く手掛りは発見できなかった。そして遺物についても，No.3－Aグリッドにて断面調査中に出土した土師器片1点のみであった。

平成4年度における天王久保の発掘調査の中では，柱状断面による上山田ローム層の確認調

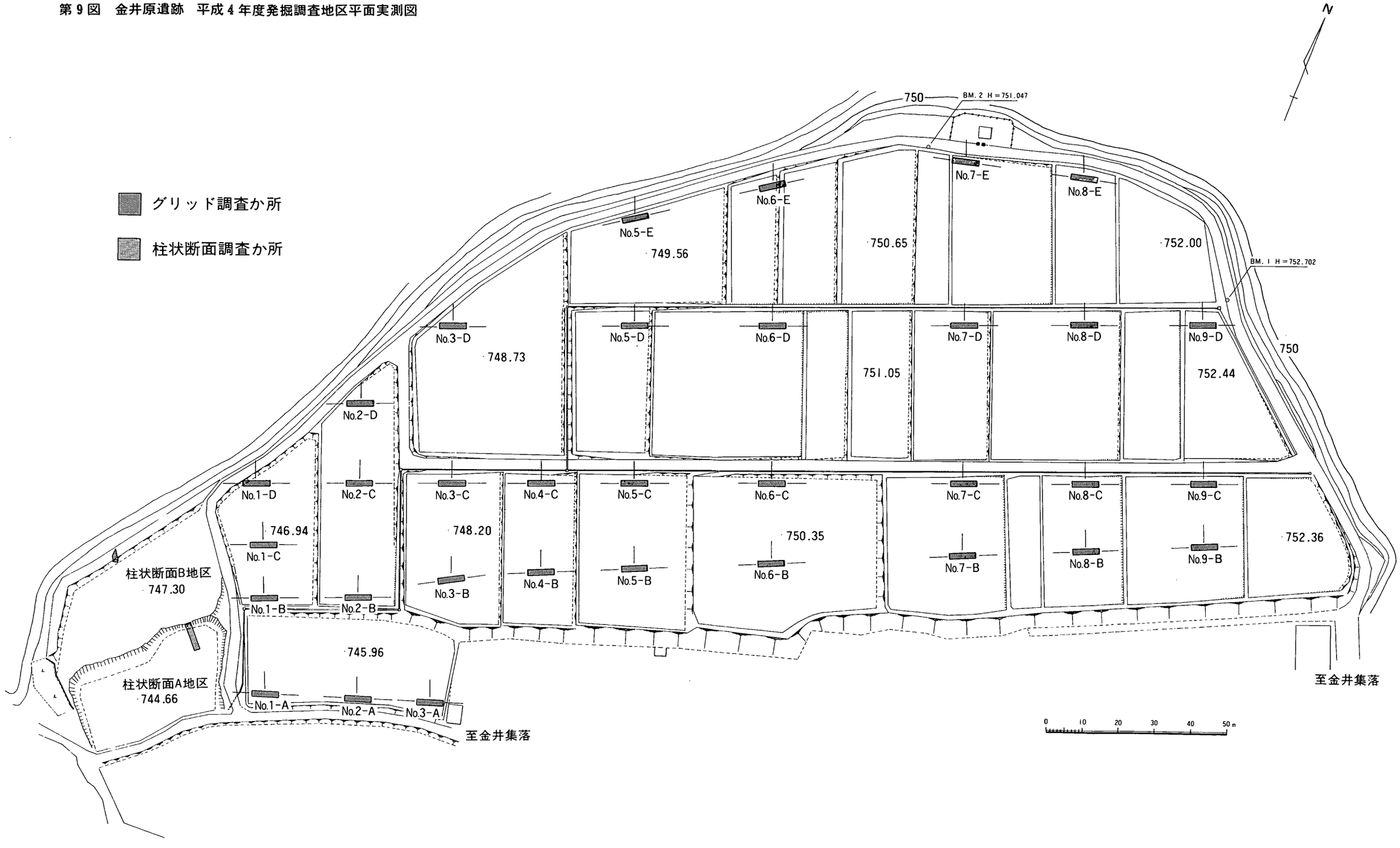
第8図　金井原遺跡　平成3年度発掘調査地区平面並びにグリッド調査実測図

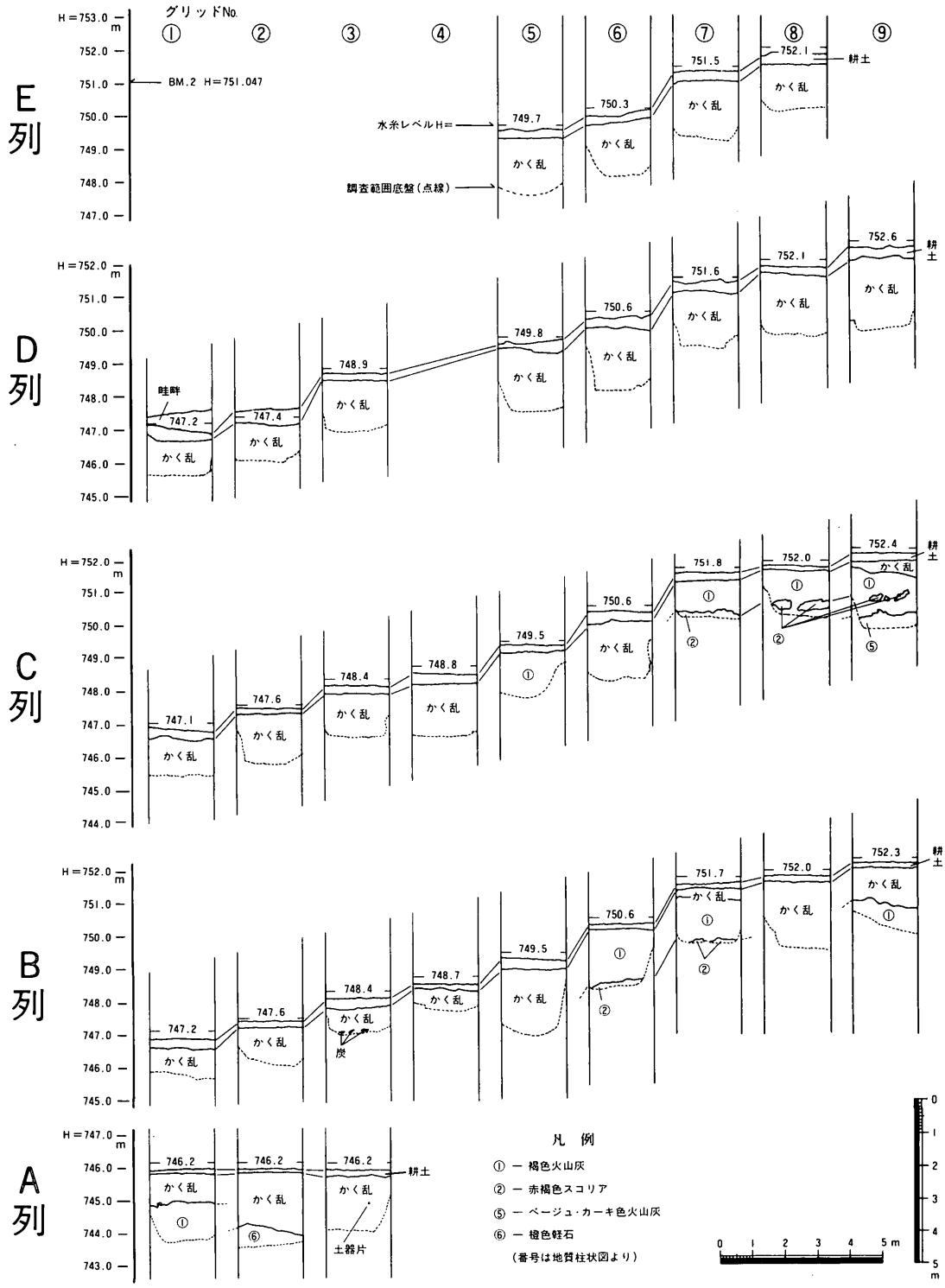




凡例　A．耕土　B．赤褐色土　C．茶褐色土　D．黒褐色土　E．黒土　F．炭　G．テフラ　H．かく乱層　（トレンチャー堀削跡）

第 9 図　金井原遺跡　平成 4 年度発掘調査地区平面実測図





第10図　金井原遺跡　平成4年度発掘調査グリッド調査実測図

査と，上山田地区内の遺物の表面採取によるところの分布調査という，２つの調査を並行して実施してきた。柱状断面については(第５，６図・図版Ⅰ，Ⅱ・図版15)，調査対象地域の西の端にあたる，高遠町大字上山田2077番地並びに2089－２番地付近は，褐色火山灰土より上の地層について取り去られてはいるものの，それ以下の層についてはかく乱されていないため，重機にて礫層まで掘り下げ，幅1.5ｍ，深さ6.0ｍの柱状断面を露出させ，実測，鉱物構成などの調査をおこない，土質標本を採取した。しかし，褐色火山灰の層より上についてここでは確認できないため，同地番の内で北へ約27m離れた位置の，ちょうど三峰川の段丘際に畦畔状に，土を取っていないと思われる場所があり，重機にて南北のラインで断面を露出させ，同様に追加調査をおこなった。前の断面をＡ地区，今度の断面をＢ地区とし，断面最上部の標高はＡ地区の地盤高でH=747.27m，Ｂ地区はH=748.02mであった。この柱状断面の調査結果については，第Ⅱ章第３節『地形・地質と三峰川扇状地の発達史』の中で詳しく説明する。

もう一方の遺物の分布調査は（第７,10～12図・図版16～21)，金井原遺跡の範囲と，引持地区について開田がおこなわれていない場所を７か所に区切り，３回に分けておこなった。金井原遺跡内では，天王久保の平成４年度調査地区南側に隣接する畑（Ｅ，Ｆ地区）と，平成３年度に調査をおこなった下の原開田地区の東側で，金井の集落との間の畑（A,B,C,D地区)，そして引持部落の東側（北垣外地区）並びに西側（高尾地区）である。この地区割りについては第７図中に記載し，成果はこの章の第２節『遺構と遺物』の中で報告する。

第２節　遺構と遺物（第11～13図・図版15～21)

平成３年度と平成４年度にわたる今回の調査では，前述のとおり遺構等の確認はできなかった。遺物についても少数の出土にとどまり，平成３年度の発掘調査ではNo.26グリッドより，石器ハク片３点，No.10グリッドよりスクレーパー１点が出土。平成４年度調査では，No.３－Ａグリッドより土器片１点が出土したのみであるが，同時に３日間をかけて実施した金井原遺跡周辺の分布調査により，合計で281点の遺物を採取することができ，また，遺物整理期間中に金井東部落の田中茂男氏より，５年ほど前に高遠町大字上山田1874番地の所有する畑より，まとまった形で氏の父である田中喜芳氏が発見し，掘り上げたという遺物64点を寄付していただき，貴重な資料であるので，分布調査の場所にあたるＤ地区に含めて以下報告することとした。

１）平成４年度発掘調査グリッド出土の土師器（第11図・図版15)

No.３－Ａグリッド出土の土師器は，胎土に雲母・長石が混入，焼成は良好である。色調は赤褐色，整形は輪積で箆削り布目ナデ痕が見られる。奈良時代の遺物と考えられる。

２）平成４年度調査か所隣接地分布調査表採の遺物（第11図・図版16)

１．碗の底部破片，土師内黒で厚さ４㎜，内面にわずか箆削痕が認められるが，横ナデで仕上げている。奈良末か平安時代の遺物。　２．皿の底部破片で土師内黒，厚さ７㎜内面横ナデ痕が見られる。底部の糸切痕は片寄に認められる。時代は平安時代。　３．碗の口縁部破片，

土師内黒で厚さ6㎜焼成は良好である。整形は両面に横ナデ痕が認められる。時期は平安時代と考えられる。　4．甕形の土師器破片で，胎土に長石・石英・雲母が混入，器面にカキ目痕が認められる。焼成良好の土器，時代は奈良時代と考えられる。　5．碗の口縁部，土師黒色，内面は黒磨でロクロ痕がわずか認められる。胎土に長石が混入していて横ズレが見られる。時代は平安時代と思われる。　6．甕形の須恵器の破片，胎土に長石・雲母が混入，焼成良好で表面は格子の叩き目痕が認められる。内面は指痕が残り，時代は奈良時代末と考えられる。

3）金井原遺跡周辺分布調査A地区採取遺物（第12図・図版17）

1．円形の隆帯に連続に竹管文が施された，縄文中期中葉末の土器。　2．横帯の隆線に爪形文と平行沈線文・蛇行線文が施された，縄文中期中葉末の土器。　3．口縁部に横位に半截竹管文が施された縄文中期中葉末に比定される土器。　4．横位に平行線文を廻らした土器。5．単節斜縄文の土器。　6．口縁部まで縄文が施された土器。　7．結節状の縄文土器の破片。　8．横位に平行文が施された土器。　9．縦と横に平行に竹管文等の施された，縄文中期後葉の遺物。

4）金井原遺跡周辺分布調査B地区採取遺物（第12図・図版17，18）

10．浮線文に瓜形文が施された，縄文前期末諸磯bに比定される土器。　11．横位に蛇行線文が施された土器。　12．横位に平行線文が施された土器。　13．平行沈線文土器。　14．平行線文と蛇行線文の土器。　15．縄文地に蛇行線文が施された土器。　16．縄文地に蛇行沈線が施された土器。　17．縄文地に縦に箆状器具で沈線が引かれた土器。　18．縄文地に沈線による蛇行懸垂文が施された土器。　19．口縁部無文と斜状文が施された土器。　20．斜縄文土器。21．竹管による平行沈線文などの縄文中期後葉の土器。

5）金井原遺跡周辺分布調査C地区採取遺物（第12図・図版18）

22．爪形が施された土器。　23．斜縄文の土器。　24．斜縄文土器で，縄文中期中葉の土器。25．竹管による平行沈線文の土器。　26．斜縄文の地に沈線による渦巻文が施された土器。27．縄文地に斜の沈線文が施された，縄文中期後葉の遺物である。　28．叩き目のある須恵器で，奈良末時代と考えられる遺物。　29．無文の須恵器で，時代は奈良時代末と考えられる。

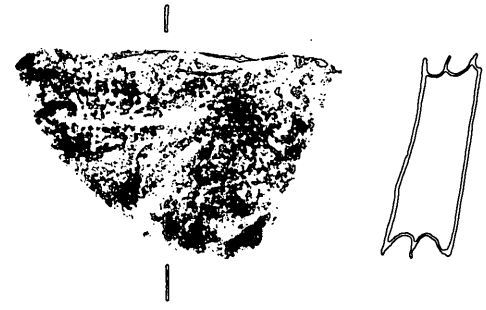
6）金井原遺跡周辺分布調査D地区採取遺物（第12図・図版21）

30．隆線による渦巻文土器。　31．平行条線文土器。　32．無文粗製土器，縄文後期と考えられる。　33．削り高台の天目茶碗，時代は16世紀頃。

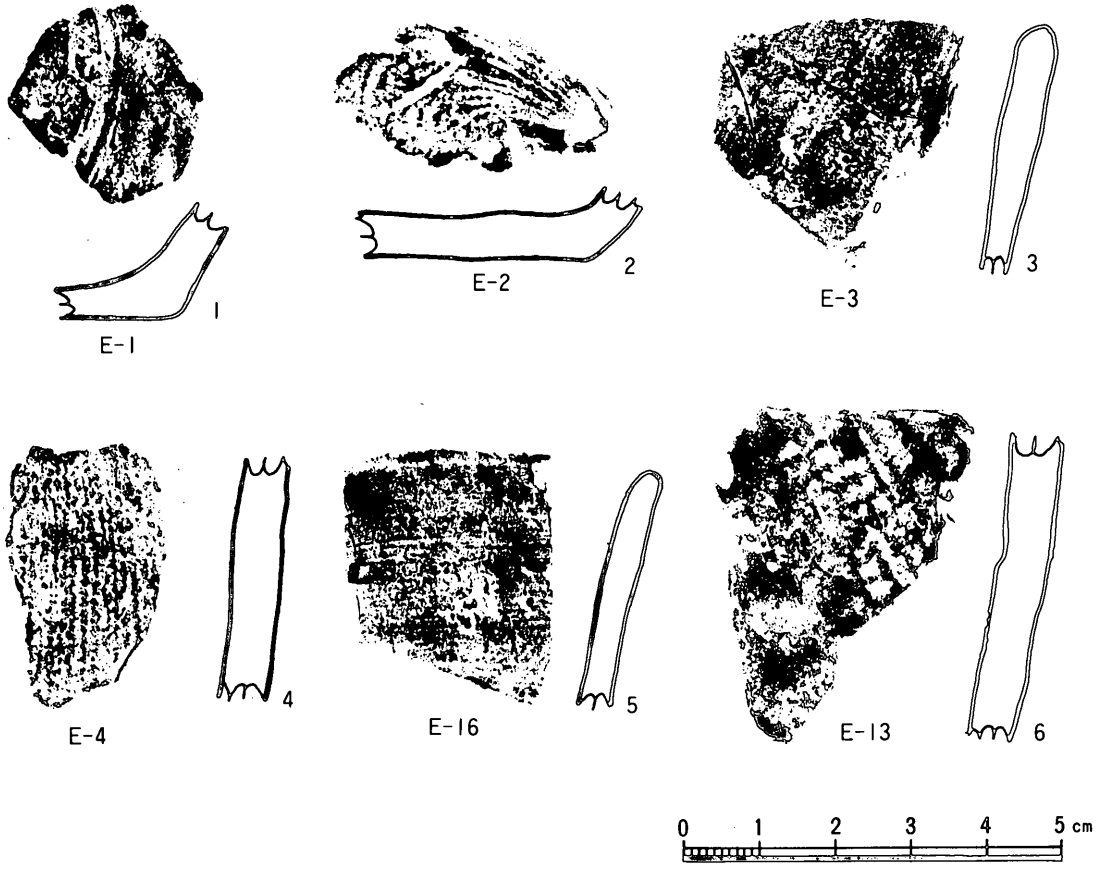
7）田中喜芳氏発見のD地区出土遺物（第13図・図版19，20）

1．隆線に連続瓜形文を施した深鉢形で，縄文中期中葉の土器。　2．粘土紐を区画状に貼

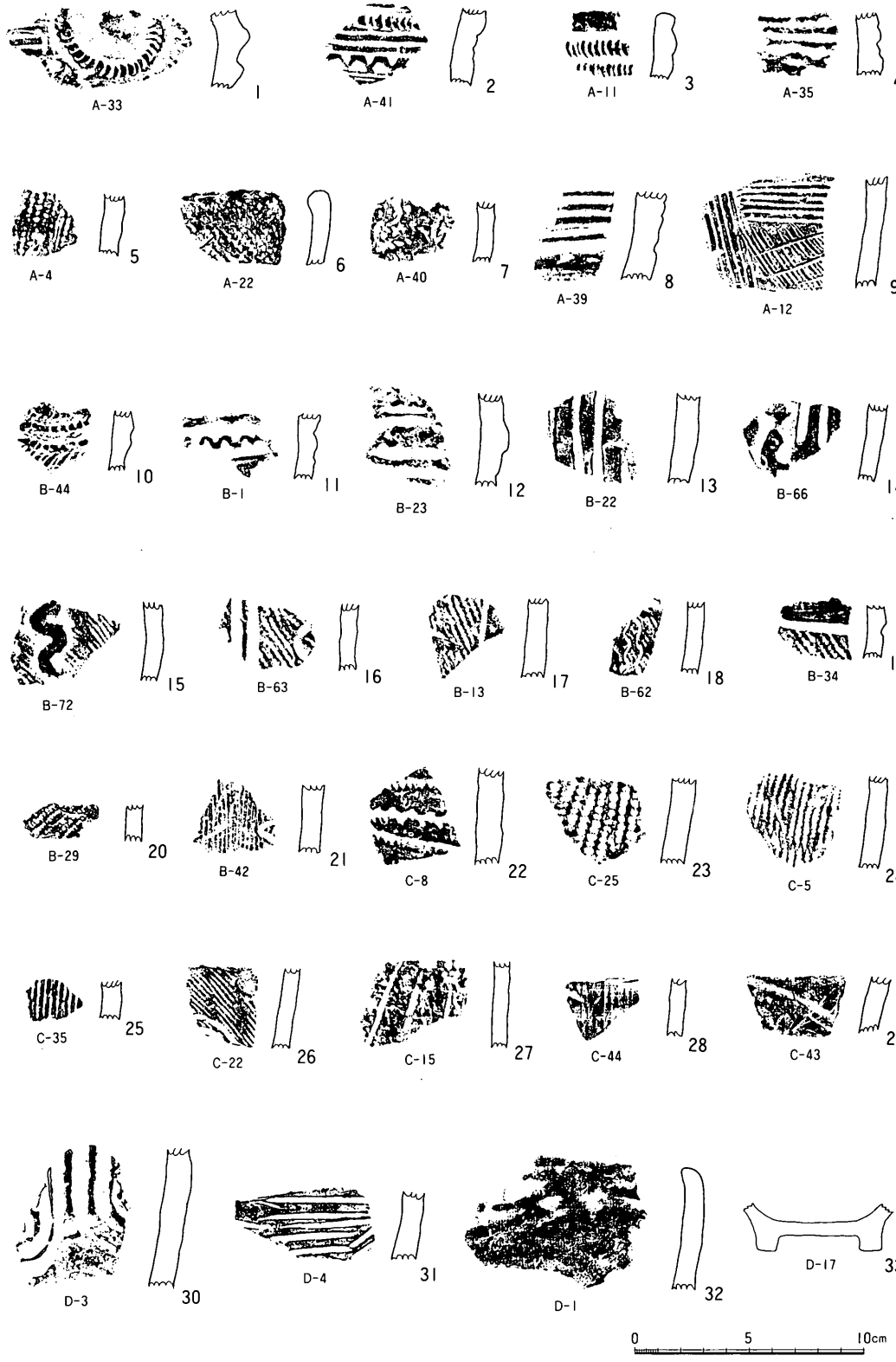
付した土器。 3．口縁部に籠目文の施された深鉢形土器，縄文中期後葉初頭。 4．地文に綾杉と沈線による渦巻文が施された深鉢。 5．隆線による渦巻文が施された土器。 6．口縁部が内形した無文帯と，頸部に粘土紐を曲状に貼付した甕形土器。 7．櫛歯状器具で，綾杉文が描かれた深鉢形土器。 8．縄文地に箆状具で，渦巻文が施された深鉢形土器。 9．箆状器具による平行沈線文と渦巻文が施された土器。 10．平行沈線文土器。 11．櫛歯状施文と沈線の懸垂文が施された土器。 12．隆線文と綾杉文の施された土器。 13.14．隆線による唐草文と平行沈線文が描かれた深鉢形。 15．隆線を懸垂し，その間に沈線による半円形文を描いた深鉢。 16．粘土紐を懸垂し，その空間に沈線文を施した深鉢形土器の底部。 17．粘土紐の懸垂と沈線文が施された深鉢形の土器で，時代は総じて縄文中期後葉の遺物である。



平成４年度　調査か所出土遺物

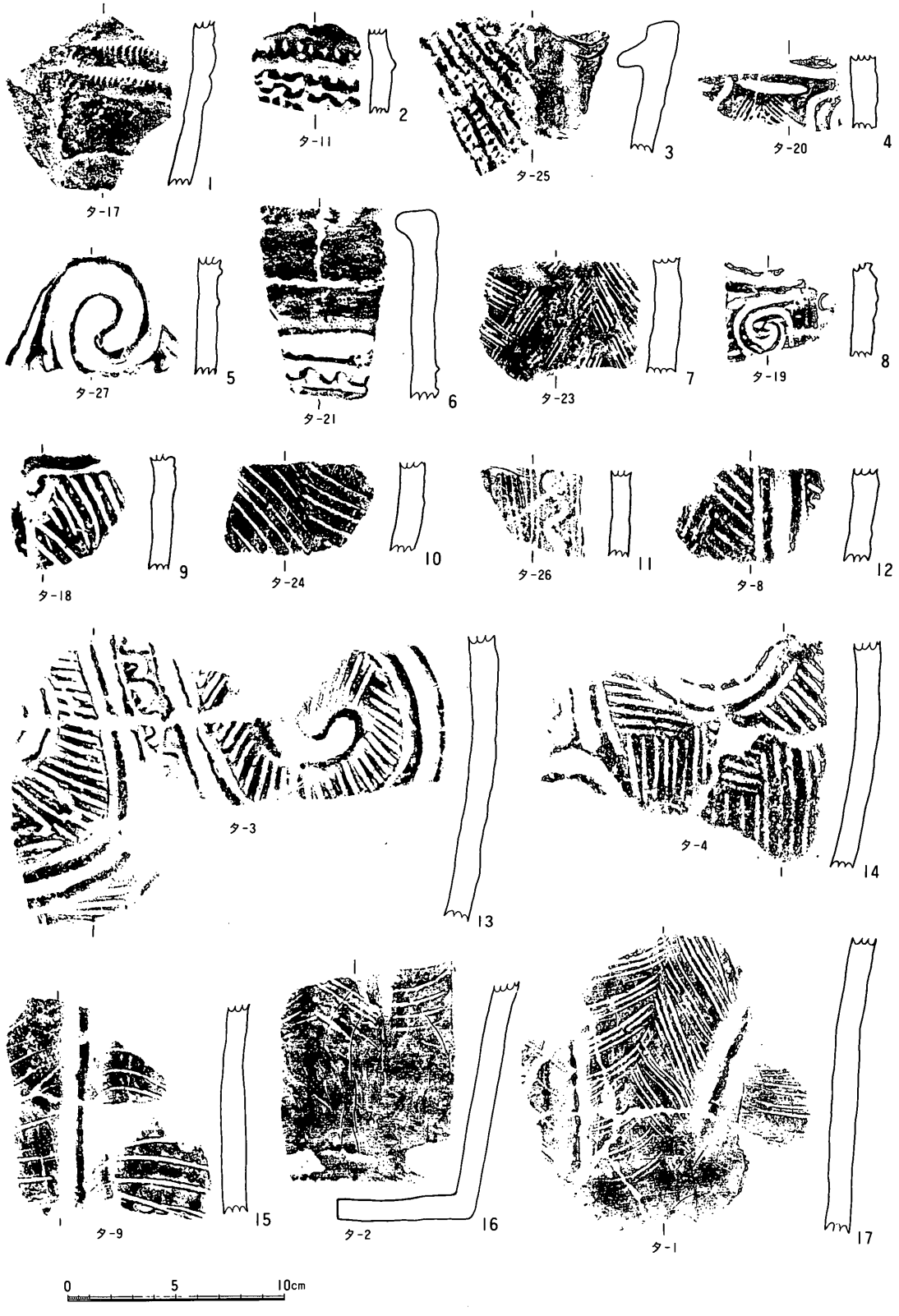


第11図　金井原遺跡　調査か所並びに隣接地採取遺物拓影



第12図　金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物拓影（1）

1～9.A地区採取　10～21.B地区採取　22～29.C地区採取　30～33.D地区採取



第13図　金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物拓影（２）

田中喜芳氏発見のＤ地区出土遺物

ま と め

今回調査がおこなわれた金井原（天王久保）遺跡は，過去において「白土」の採取が大規模におこなわれた事実と，それに続いて土地改良工事が実施された関係で，遺跡の大部分は破壊されてしまったのではないかと思われていた遺跡である。

今回工業団地として造成されることに先立ち，埋蔵文化財の発掘調査を実施した。調査は二回に分けておこない，一回目は平成3年度において，遺跡北側に面した中段の場所に，工業団地に通じる道路の拡幅がおこなわれる計画になっている地域である。この地域の東側は，以前より土器・石器が出土した地点に接している。調査は道路南側添いに，2m×2mのグリッドを10m毎に設定しておこない，その結果は，以前実施された土地改良工事の際に切り取られたらしく，遺跡の包蔵層のほとんどは失われてしまっており，遺構など発見することができなかった。

二回目は，平成4年度に工業団地造成が予定されている天王久保地区の調査である。この地域は前述にあるように，白土の採取された区域が明らかになっていないので，その区域を明確にすることと，白土を採取されていない場所に遺跡が残っているかどうかである。調査は，一応工事計画にある全区域にグリッドを設けておこなったが，その結果はグリッド断面柱状図（第10図）に見られるように，白土を採取した区域は全体の70～80％に達していることが確認された。しかし，残ったか所も，白土採取後実施された土地改良工事のため，耕地はほとんど整備され，遺構は破壊されてしまったと判断するに至った。

また，今回の調査の中で，工業団地造成に係わる部分はもちろんであるが，南側に隣接する凹地（E・F地区）は，工業団地に造成される遺跡と同じ種類に属する遺跡と考えられるので，表面採取による分布調査を実施したところ，第11図・図版16に見られるように，土師器が多く縄文土器は認められなかった。こうしたことから天王久保の遺跡は，奈良から平安時代の遺跡ではなかったかと考えられる。

その他この地域の地形・地質の調査を，松島信幸，寺平宏の両先生にお願いし，大きな成果を得たことは特筆すべきことの一つである。

発掘調査団長　友野　良一

●発掘調査に参加された方々（順不同）●

＜平成3年度発掘調査＞

田中　茂男・伊藤　邦弘・山下　　隆・小松　照夫・小池　　正・伊藤　義明
伊藤　　清・牛山　　博・北村　勝彦・平沢かほる・名和　長利・小松　博康
（有）阿部組

＜平成4年度発掘調査＞

井口　和徳・山崎　大行・福沢　　聖・新本ふじ子・北原　利夫・河合　邦房
伊藤　　清・牛山　　博・北村　勝彦・保科まゆみ・名和　長利・小松　博康
清野建設（株）

あ と が き

高遠町天王久保工業団地造成並びに連絡道路整備事業に係わる，緊急発掘調査の経過と成果につきましては本文中に記載したとおりであります。

この報告書を発刊するにあたり，調査団長の友野良一先生には，多忙であるにもかかわらず遠く宮田村よりご足労願い，今回は二年度にまたがる調査であり，調査期間は短かかったものの冬期間であったため，ご苦労をおかけしたと思いますが，陣頭指揮をとる傍ら休憩時間などを利用して，作業員の皆さんと学習会を持っていただいたり，進んで歴史調査の大切さなどを教えていただきました。また，調査員の松島信幸，寺平宏両先生にも，高遠町の地形・地質の面で調査を深めていただき，発掘調査から報告書の執筆まで，期間の短いところをご尽力いただきまして，報告書を発刊することができました。心より感謝申し上げる次第であります。

また，この調査に参加していただきました作業員の皆さん，地元をはじめご協力いただきました方々に，この場をお借りして感謝申し上げ，お礼のことばといたします。

高遠町教育委員会
教育次長　伊藤　敏明

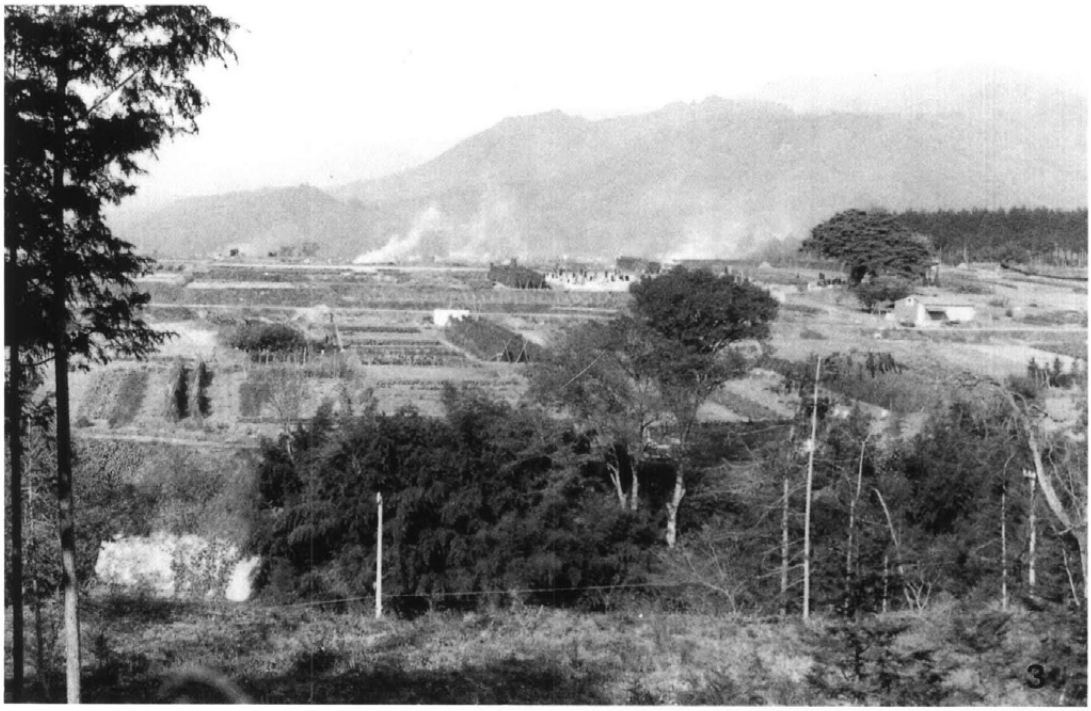
≪ 参考文献 ≫

上伊那教育会	1926	「先史及原始時代の上伊那」
長野県（校訂　栗岩英治）	1936	「長野県町村誌（南信版）」
上伊那教育会	1965	「上伊那誌（二巻歴史編）」
小林達雄　他	1977	「日本原始美術大系Ⅰ」
長野県史刊行会	1981	「長野県史（考古資料編）全一巻（三）」
岡本　勇	1981	「縄文土器大成　2　中期」
高遠町教育委員会	1982	「勝間一堀遺跡」
高遠町誌刊行会	1983	「高遠町誌（上巻歴史編）」
小林　達雄　他	1988	「縄文土器大観　2　中期Ⅰ」
		「縄文土器大観　3　中期Ⅱ」
長野県誌刊行会	1988	「長野県誌（考古資料編）南信全一巻（四）」
小林　達雄　他	1989	「縄文土器大観　4　後晩・続縄文」
高遠町教育委員会	1990	「原勝間遺跡」
〃	1991	「高遠町小字マップ」
伊那市土地開発公社・伊那市教育委員会	1991	「下原遺跡」
高遠町教育委員会	1992	「史跡高遠城跡二ノ丸Ⅱ」

写真図版

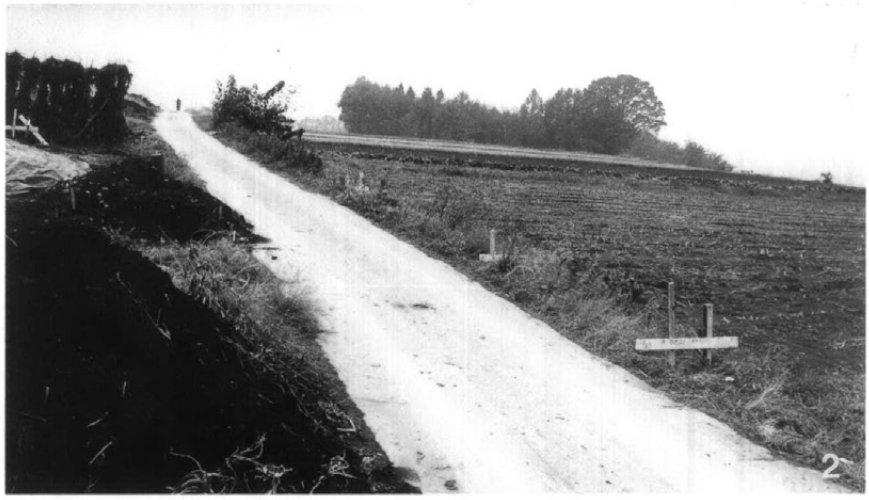
図版 1

金井原遺跡　平成 3 年度調査か所遠景（東側から西を望む）



3. 金井原遺跡　平成 3 年度調査か所遠景（南側から北を望む）
4. 金井原遺跡　平成 4 年度調査か所遠景

図版 3

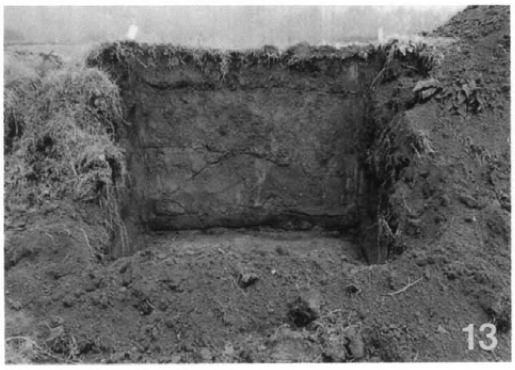


金井原遺跡　平成 3 年度発掘調査中の状況

金井原遺跡　平成３年度グリッド調査状況（１）

１．No.１グリッド　２．No.２グリッド　３．No.５グリッド　４．No.６グリッド
５．No.９グリッド　６．No.10グリッド　７．No.12グリッド　８．No.14グリッド

図版 5



金井原遺跡　平成 3 年度グリッド調査状況（2）

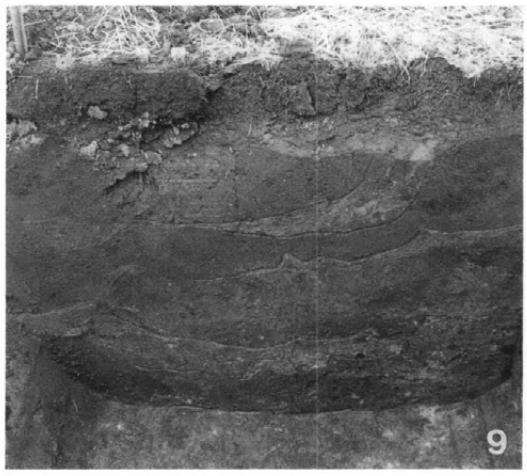
9．No.13グリッド　10．No.15グリッド　11．No.17グリッド　12．No.19グリッド
13．No.20グリッド　14．No.22グリッド　15．No.23グリッド　16．No.26グリッド

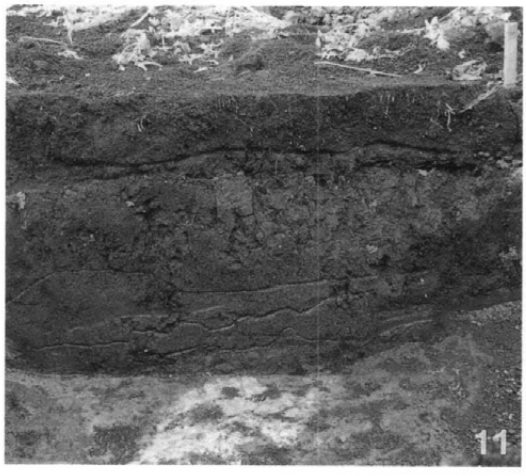
金井原遺跡　平成 4 年度発掘調査中の状況

図版7

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（1）

1．1－Aグリッド　2．1－Bグリッド　3．1－Cグリッド　4．1－Dグリッド
5．2－Bグリッド　6．2－Dグリッド





金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（2）

7．3－Aグリッド　8．3－Bグリッド　9．3－Cグリッド　10．3－Dグリッド
11．4－Bグリッド　12．5－Bグリッド

図版 9

5－C
グリッド

5－D
グリッド

5－E
グリッド

金井原遺跡　平成 4 年度グリッド調査状況（3）

6－B
グリッド

6－C
グリッド

6－D
グリッド

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（4）

図版11

6－E
グリッド

7－B
グリッド

7－C
グリッド

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（5）

7－D
グリッド

7－E
グリッド

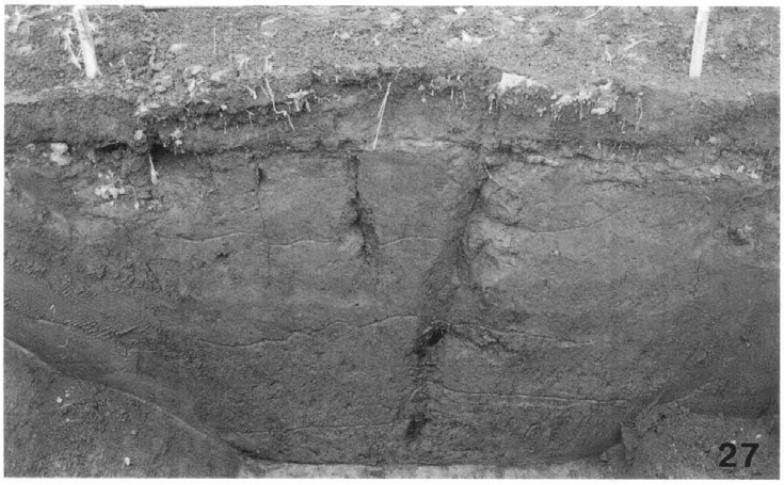
8－B
グリッド

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（6）

図版13

8－C
グリッド

8－D
グリッド



8－E
グリッド

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（7）

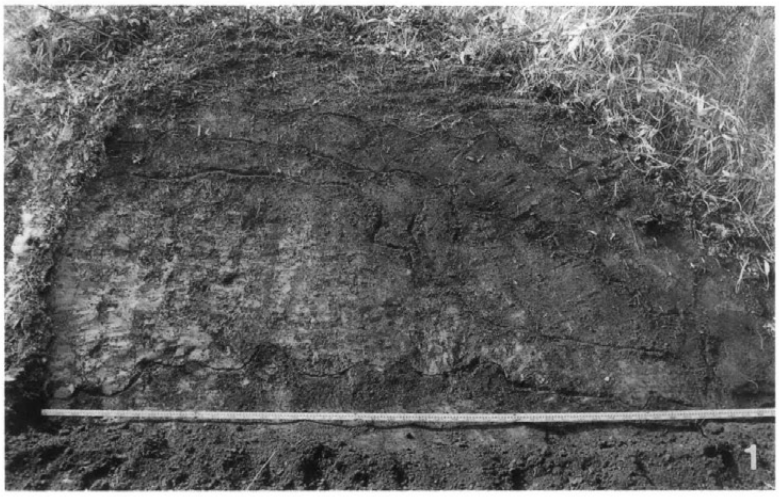
9－B
グリッド

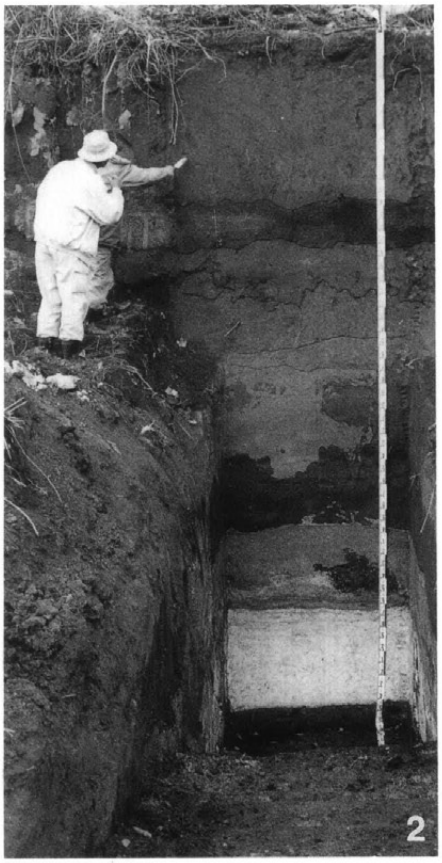
9－C
グリッド

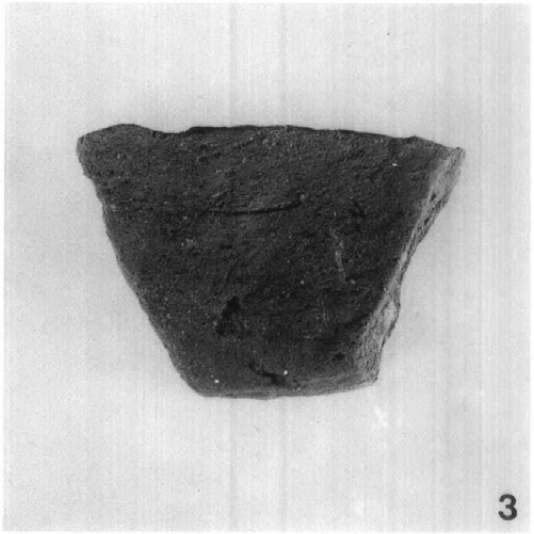
9－D
グリッド

金井原遺跡　平成4年度グリッド調査状況（8）

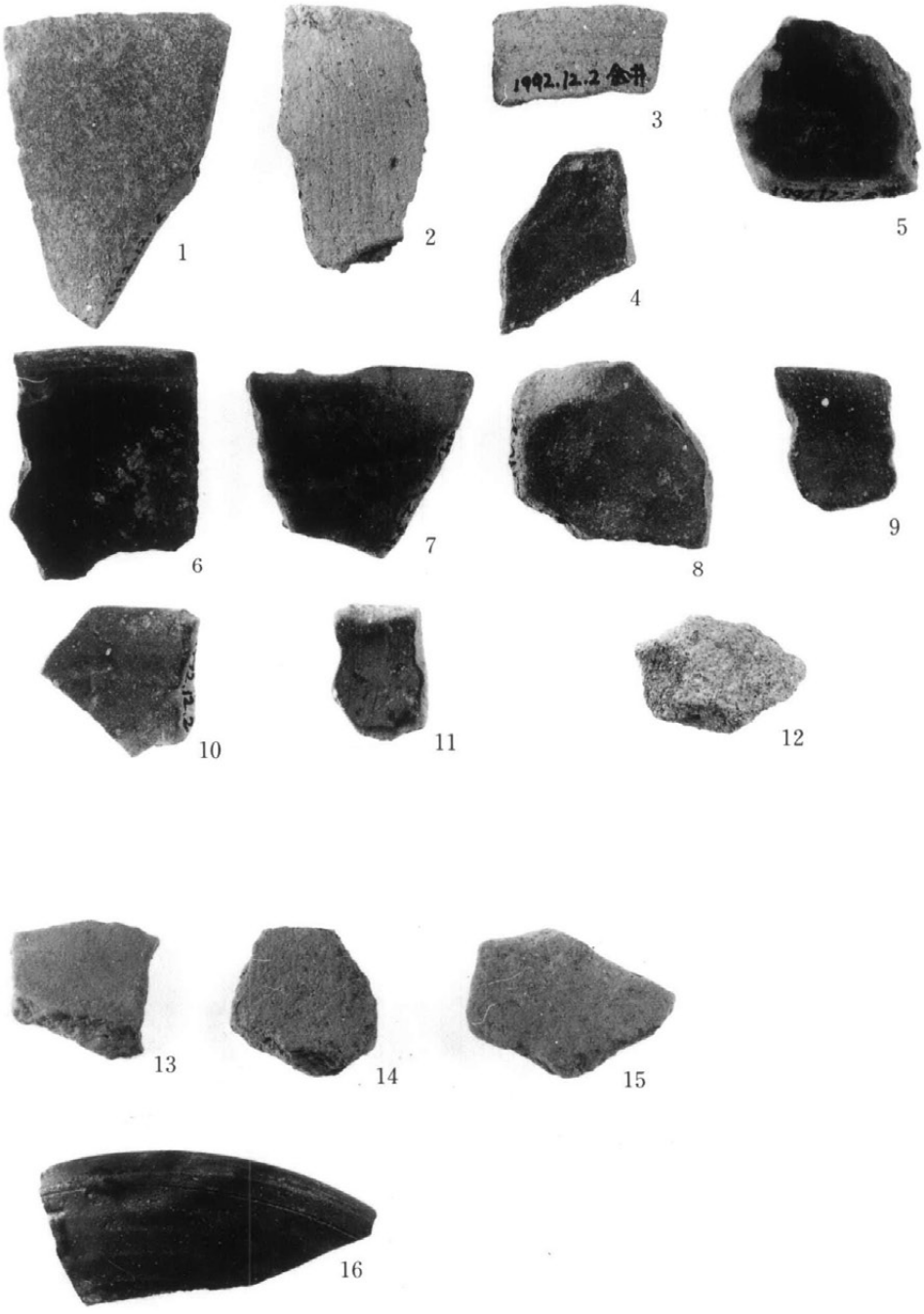
図版15





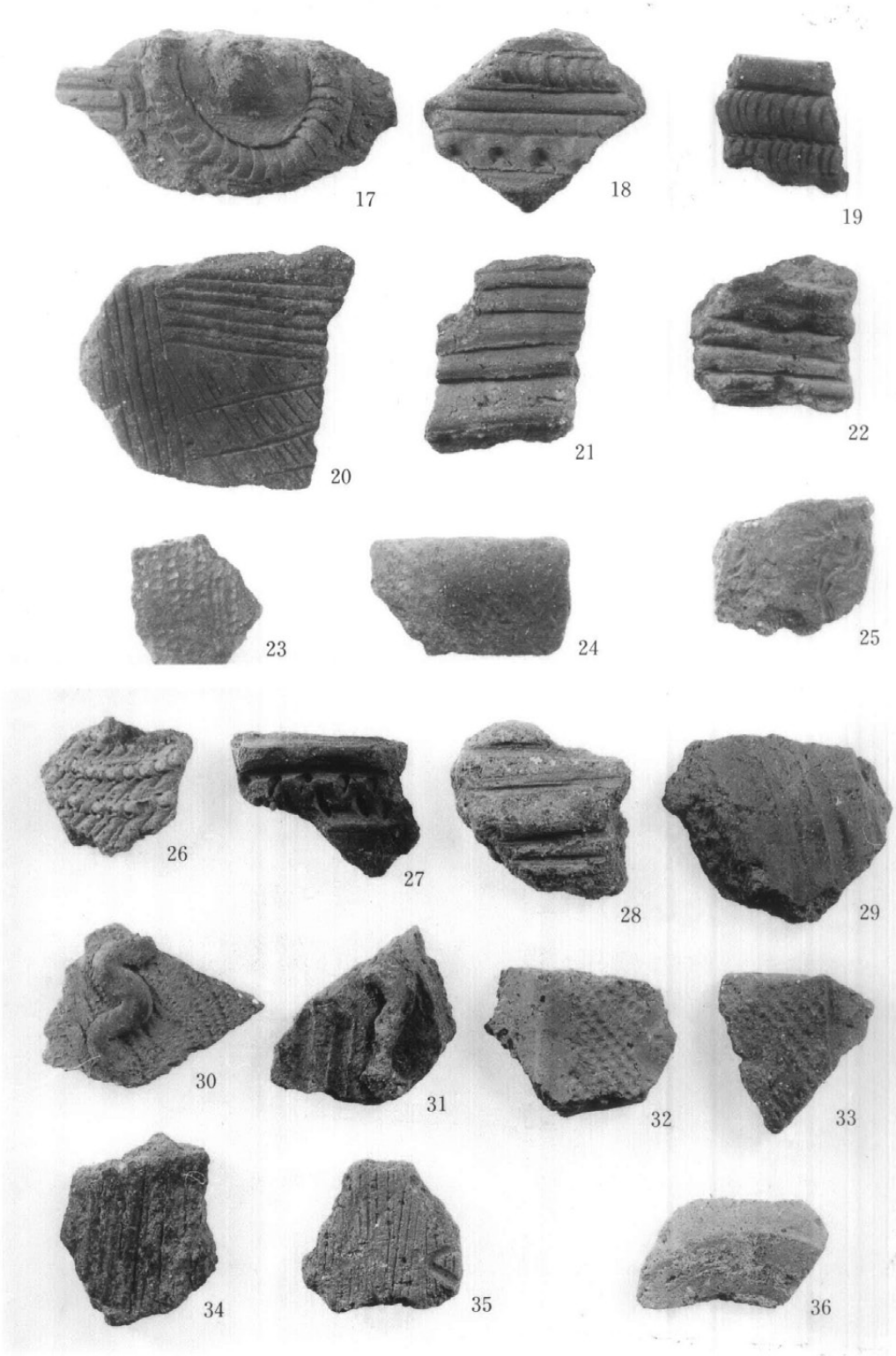


1. 金井原遺跡　平成4年度柱状断面B地区調査状況
2. 金井原遺跡　平成4年度柱状断面A地区調査状況
3. 金井原遺跡　平成4年度発掘調査出土遺物



金井原遺跡　調査か所隣接地分布調査採取遺物（上．E地区・下．F地区）

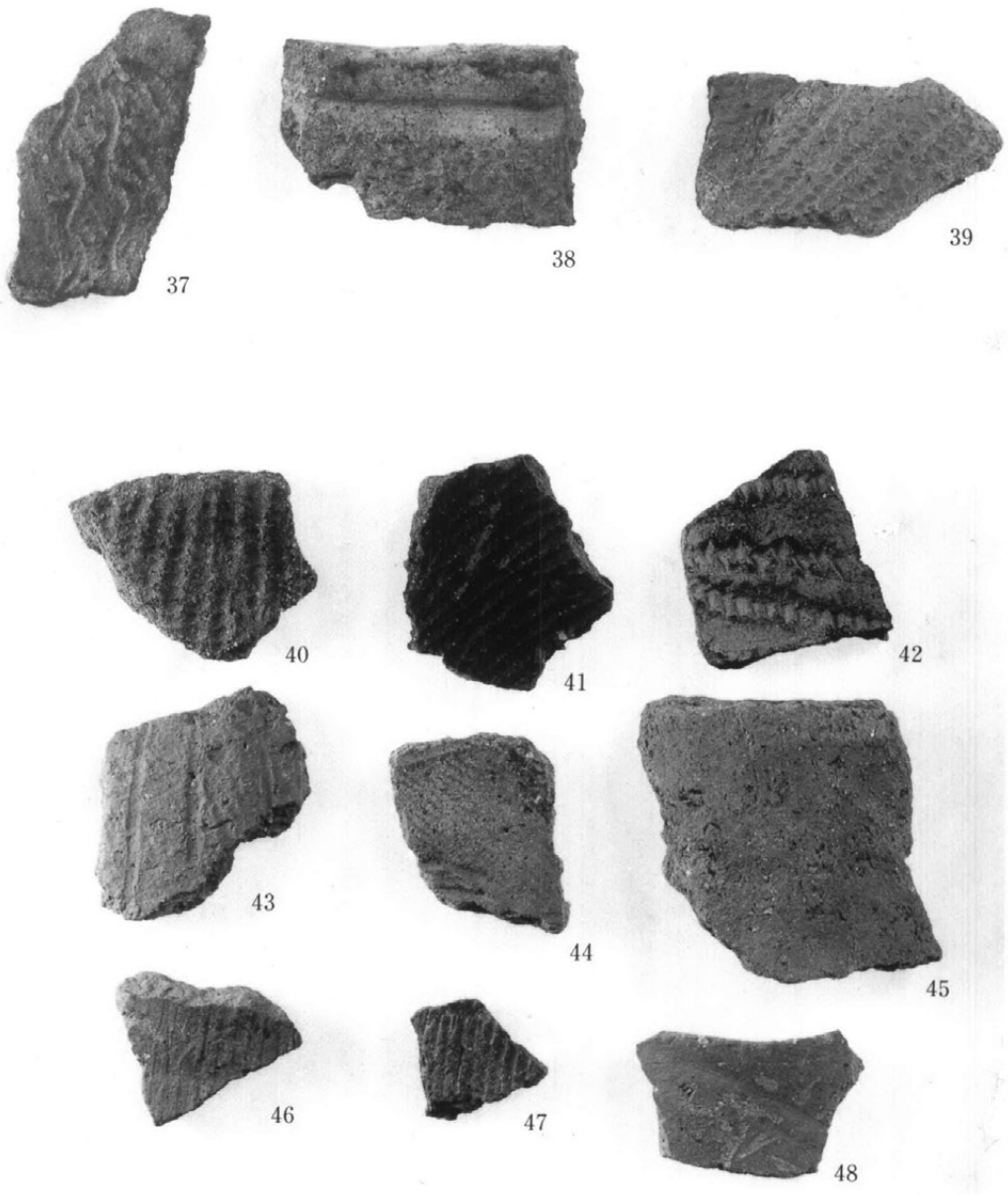
図版17



金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物（上．A地区・下．B地区－1）

17～25．縄文中期中葉から後葉にかけての遺物　26．縄文前期諸磯b式土器

27～35．縄文中期後葉の遺物　36．灰釉陶器の底部



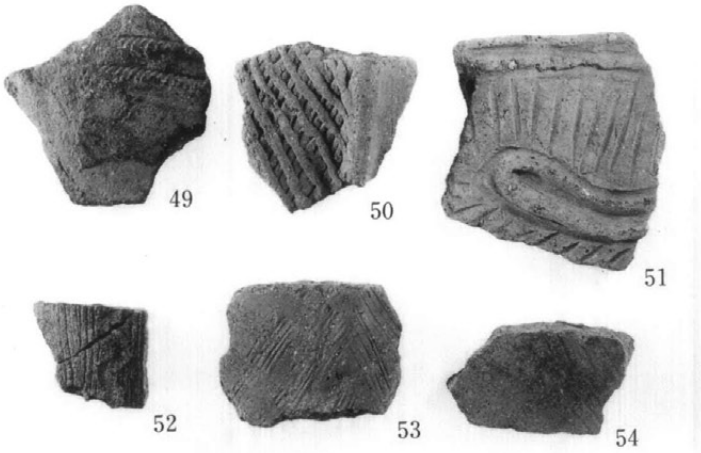
金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物（上．B地区－2・下．C地区）

37～39．縄文中期後葉の遺物　　40～41．縄文中期後葉の遺物

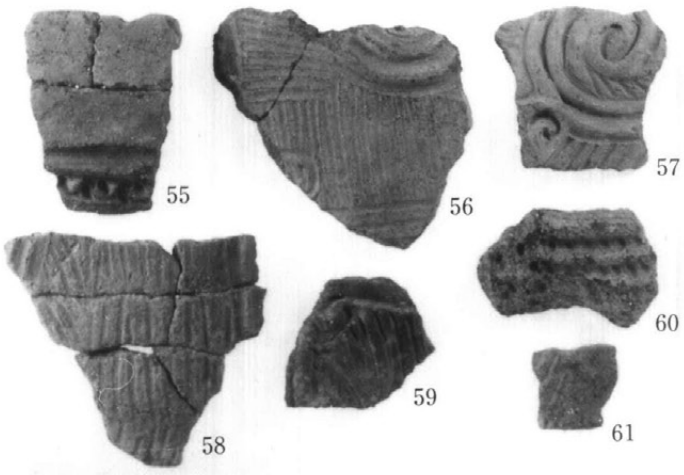
42．縄文中期中葉の遺物　　43～47．縄文中期後葉の遺物

48．須恵器（奈良・平安）

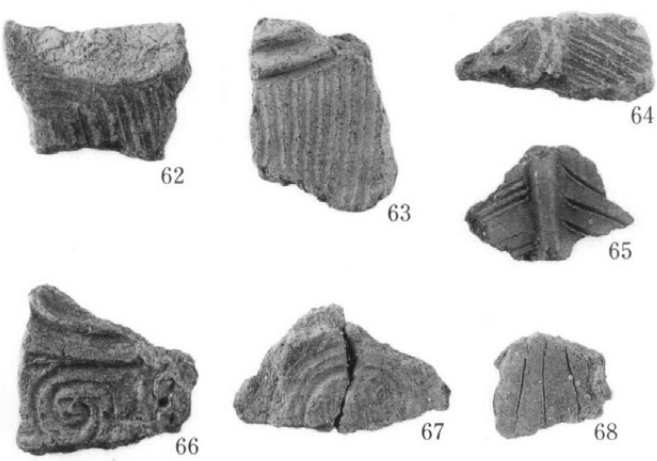
図版19



49．縄文期
50．縄文中期後葉初頭
51～54．縄文中期後葉



55．縄文中期中葉
56～61．縄文中期後葉

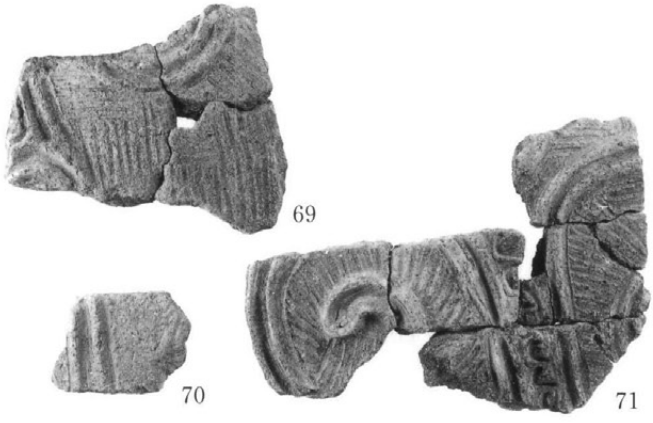


62～68．縄文中期後葉

金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物（D地区－1）

田中喜芳氏発見の遺物

69～71．縄文中期
唐草文様土器



72.73.
縄文中期後葉

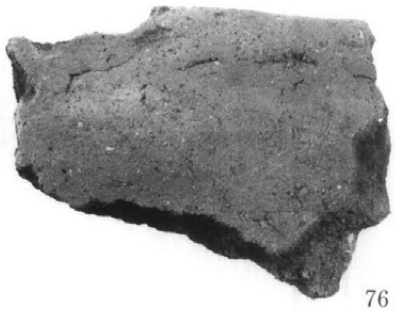
74．縄文中期後葉の
深鉢形土器の底部

金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物（D地区－2）

田中喜芳氏発見の遺物

図版21

75

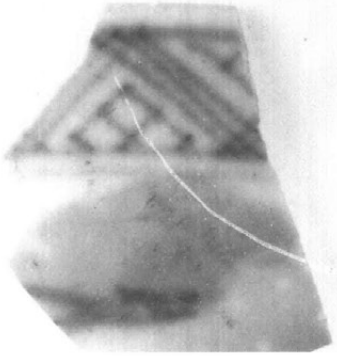

76

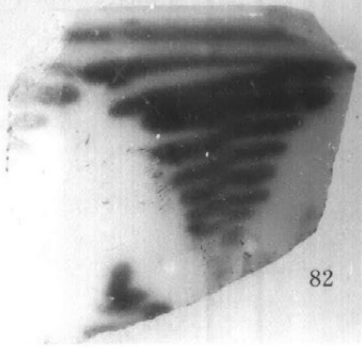
77

78

79

80


81


82

金井原遺跡　周辺分布調査採取遺物（上．D地区－3・下．引持北垣外）

75～77．縄文中期後葉　　78．天目茶碗（室町）　　79.80．土師器（奈良・平安）

81.82．染付（江戸）

高遠町天王久保工業団地造成事業
高遠町天王久保地区農林漁業連絡道路整備事業

金井原遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成5年3月

発行　高遠町教育委員会
印刷　㈱オノウエ印刷
長野県諏訪市中洲586